

教師はいじめにどう対応していくか
～「自主協同学習」の理念と実践をベースとして～

関根 廣志

<目次>

はじめに	5
1 いじめの問題をどうとらえていくか	6
(1) いじめはどんな集団でも起きる可能性はある ～その備えは常に必要～	6
① なぜいじめはどの集団でも起きる可能性があると言われるのか	6
② 集団のリーダーである教師にはどんな心構えが必要か	6
③ 「集団いじめ」発生の基本メカニズム	6
④ 誰もが被害者にも加害者にもなりうるが、経過や構図が変わってきている	7
(2) いじめ問題の深刻さ	7
① いじめは、「時には命にかかわる」とずっと言われ続けている	7
② いじめによる自殺後には、その周囲にどんな困難が待っているか	7
③ いじめに限っては“雨降って地固まる”という関係になることはない	8
④ 被害者の受けた心の傷は、生涯にわたり人格形成に影響を与えていく	8
⑤ いじめの解決に向け、必ずやらなければならないことは、正確な「事実確認」である	9
⑥ 時に加害者も大きな傷を負い、家庭が壊れることもある	9
(3) 学校における子どもを取り巻く厳しい現実	10
① 子どもはいつの時代でもダブルスタンダードの中で生きている	10
② 集団の中に居続けるには、本当の自分とは違う個性を演じる必要もある	10
③ いじめはしたたかに、しかも巧妙に行われる	11
④ 学級で出来ている階層(ヒエラルキー)は、教師がつくっていると云ってもよい	11
(4) ますます指導が難しくなっている最近のいじめ	11
① 匿名だが、ほぼ相手がわかっているいじめの蔓延	12
② 匿名でも稀に加害者が特定された場合の、その後の指導の難しさ	12
③ 「いじり」という巧妙ないじめの手口の流行	13
④ ツッパリグループのあるところには、必ずと言ってよいほどいじめが存在する	13
⑤ 中学校では、女子の仲間外しがもっとも深刻である	13
⑥ 「仕返しいじめ」は、保護者はむしろ当たり前と考え、子どもを応援する	14
(5) 指導に困難を極めるメディアによるいじめ	14
① メディアによるいじめの怖さ	14
② ネットいじめによる被害者の苦痛	14
③ 加害者がほぼ特定できても、どうしようもできない	14
④ スマホのラインの危うさ	15

2	教師は何をしていけばよいか	15
(1)	どうしても教師がいじめを見つけたい	15
①	教師の“声かけ”に勝るいじめの発見や予防はない	15
②	いじめの情報提供者を守るには膨大なエネルギーがいる	16
(2)	いじめは大人が介入しなければ絶対に解決せず、安易に子どもに頼ってはならない	16
(3)	教師のいじめに対する危機意識と感性を磨いておきたい	16
①	教師の潜在意識のあり方が、いじめ発見に向けての大きな問題となる	16
②	子どものふだんとの違いをすかさず察知する教師の鋭い感性は重要	17
※	必ず読んでやりたい子どもからのメッセージの例 (順不動)	17
③	よく観ていれば、ふざけかいじめかはすぐにわかる	18
④	いじめアンケート調査の限界と役割	18
3	いじめの解決に向け、特に大事にしたいこと	18
(1)	いじめの解決は、何をおいても「最優先」で「学校チーム」で	18
(2)	被害者を守り、その思いに応えることから問題解決のスタートを	19
(3)	双方の保護者への対応は迅速でいねい正直に、決して情報飢餓状態におかない	19
(4)	問題の解決を両者の安易な手打ちでは絶対に済ませない	19
(5)	解決したと思った、その後の見届けこそが本当の解決につながる	20
(6)	いじめの再発は保護者も社会も決して許さない	21
(7)	いじめの傍観者は本当の加害者と同列にはとらえられない	21
4	いじめる子への指導をもっときめ細かに	21
(1)	いじめる原因や背景を探り、まずそこに心を寄せていく	21
(2)	彼のストレスの元になっていることには保護者との同一認識で解消に向かいたい	22
(3)	いじめ指導のポイントは「謝罪」の仕方と子ども特有の心理の理解にある	22
(4)	加害者には発達段階に応じた責任のとらせ方も重要である	23
(5)	加害者の再出発は排除ではなく、教師、学級集団ともどもの再スタートから	23
(6)	どうすべきかを自分で考え決定し責任をとる態度の形成を目指していく	23
(7)	たとえどんな理由があろうと「いじめ」は許されないことを訴え続ける	24

5	いじめられやすい子や将来のいじめ被害が想定される子の支援を入念に	-- 24
(1)	いじめられている子の悲惨な現実	----- 24
①	いじめが発覚した後の、更なるいじめのひどさを誰よりもわかっている	----- 24
②	いじめられていることを一番言えないのが親である	----- 24
③	ターゲットが変わるまで、苦しく悲しい日々が延々と続いていく	----- 25
④	いじめる側の巧妙な手練手管でいじめが継続していく	----- 25
⑤	とうとう耐えられなくなると、ようやくいじめを察知してもらえる行動にでる	-- 25
(2)	いじめられる原因がはっきりしているような子どもには	----- 26
(3)	たとえ指導の難しいいじめであっても、それでもいじめは許されない	----- 26
(4)	仲間から外されやすい特徴をもった子には、全力で改善に向けての指導を	---- 27
※	どんな特徴をもった子が仲間を外されやすいか	----- 27
(5)	真の解決には、友だち(心友)の「一緒にやろうよ」の一言が何より必要である	-- 27
6	いじめに対し教師はどんな心構えで、実践上どんな点に力を注げばよいのか	----- 28
(1)	月並みだが、子どもから信頼される教師となるよう努力を	----- 28
①	教師はいつでも弱い子の一番の味方、側にいるだけで子どもが安心できる教師に	----- 28
②	いじめを生まないためにも、徹底して一人一人との平等な人間関係の構築を	--- 28
③	教師が「弱い子を中心とする学級運営」のスタンダードをつくっていく	----- 29
④	教師は集団に最も大きな影響を与えるリーダーであるとの自覚が必要	----- 29
⑤	教育は、学びの結果とそのプロセスの双方に価値があることの認識を	----- 29
⑥	教師の「笑顔と待つ心」はことのほか子どもを伸び伸び安心させる	----- 30
⑦	教師は品性あふれる立ち居振る舞いで、生き方の1つのモデルに	----- 30
(2)	実践をすすめる上では、教師はどんなことに力を入れればよいか	----- 30
①	教師の“気になる”という感覚こそ大事にしたい	----- 30
②	一人一人のよさや得意が発揮できる出番を用意し、全員を目立たせたい	----- 31
③	子どもが送るサインを読み、彼の背景に心を寄せる	----- 31
④	フォーマルな場での子ども同士の交流(協同活動)の活性化が仲間づくりの王道	-- 32
⑤	友だち同士が明るいあいさつを交わし合っている学級・学校を目指す	----- 32
⑥	人間関係づくりは強制できない、しかし誰とでも力を合わせられるまでに	---- 32
⑦	順位をつけて終わるのではなく、常に「みんながゴールすることをみんなの目標に」	----- 33
⑧	「みんながゴールする学級づくり」の実現は「学び合い」の充実から	----- 34
⑨	いつでも「貢献」、「感謝」、「期待」をキーワードに活動をすすめる	----- 34

7	いじめをしないために個人や学級はどんな力をつけていけばよいか	-----	35
(1)	いじめをしないために、一人一人にはどんな力をつけていけばよいか	-----	35
①	「自己抑止力(自律の心)」の形成	-----	35
②	「情緒的共感性」、とりわけ“心が痛む”という心情の育成	-----	35
③	自分から挨拶したり仲間に入るなど、「自発的な行動力」の育成	-----	36
④	相手を気遣う自分の思いを、的確な言葉にして伝える力の育成	-----	36
⑤	相手が喜ぶこと嬉しくなること、それが自分の喜びとなるようになれば最高	---	37
⑥	困っている子を見たら心を痛め、“ほっておけない子ども”にしたい	-----	37
(2)	集団にはどんな力をつけていけばよいか	-----	38
①	いじめ防止への取組は、理想とする集団づくりそのものである	-----	38
②	相手と比べ妬むのではなく、相手のよさを素直に認め合える関係づくりを	-----	38
③	教師が率先し、モデルとなりながら望まし風土や集団規範をつくり上げていく	--	38
④	一人一人が存在感をもち集団に貢献することで確かな居場所づくりを	-----	39
⑤	子どもの中に、支援的リーダーをできるだけたくさん育てる	-----	39
⑥	集団が自己評価を行うシステムをつくり、互いに注意し合える関係を	-----	40
8	いじめを許さない学級ではなく、みんなが仲よく高め合う学級を	-----	40
(1)	「いじめを許さない学級」ではいつまでもいじめはなくなる	-----	40
①	行動の基準が「いじめかいじめでないか」では学級が暗くなる一方である	-----	40
②	「いじめたかどうか」ではなく、「助けたかどうか」を厳しく問える学級に	-----	40
(2)	いじめを防ぐにはやっぱり教育の力がなくてはならない	-----	41
(3)	「みんなが仲よく高め合う学級」をつくるための指導のポイント	-----	41
※	「みんなが仲良く高め合う学級づくり」のための指導のポイント (順不動)	---	41
	おわりに	-----	42
	<主な参考文献・資料>	-----	43

教師はいじめにどう対応していくか ～「自主協同学習」の理念と実践をベースとして～

関根 廣志

はじめに

平成25年9月28日「いじめ防止対策推進法」が施行された。そこには、国や地方公共団体、学校がいじめの防止や早期発見、対応についての義務や努力義務が明記されている。内容的には驚くものは何もないが、社会的な批判がますます強まってきている学校でのいじめについて、国が法律をもって撲滅に乗り出してきたことが大きな衝撃であった。

しかしそれにもかかわらず、学校現場ではいじめがなくならないどころか、ますます深刻さを増し、連日マスコミのトップニュースになるようないじめ自殺やいじめの問題が発生し、新潟県は不名誉ながらその問題では全国的な注目を集め、県教育、とりわけ学校は今正念場を迎えている。社会や世論は同じ問題の繰り返しの発生にはとてつもなく厳しい。

いじめ問題に対しては、行政に言われまでもなく学校現場では日々解決や防止に向け、厳しい取組みが行われている。しかしながら、決定打を打てないというのが実情である。

今起きているはっきりとしたいじめを止められても、それを教訓にした学校全体としての根本的な体質改善ができないため、何かのきっかけさえあれば、日本中どこの学級でも集団でも、いつでも起きる要素をそのまま抱え、根絶できないでいる。

さらに近年のいじめは旧来の形態を残しつつ、スマホなどの急激な普及もあり、その様相を刻々と変え、より解決が困難になってきている。ただ評論していても何も変わらない。

ところで、子どもたちの健全な成長に責任をもたなければならない学校は、たとえ法律がどうであれ、時には子どもの命にかかわり、被害者はもちろんのこと、加害者にも心に大きな傷を負わせるいじめを根絶しなければならない責務がある。

いじめは、さまざまな集団の中での対人関係が破綻をすることで起きる。人間は誰でも「相手には負けたくなく足を引っ張る」、「自分より弱い者がいることで安心する」などいじめにつながる人間性を内包していること否定することはできないであろう。

その上ともすると学校は、何の努力も改善もなければ、その人間性を利用したり、敢えて助長しかねない集団組織やシステムを本来的にもっていると言っても過言ではない。

また現代では、ますます危うくなってきている人間関係とともに、情報機器の急速な発達等により、いじめは誰もが加害者になったり被害者になったりする可能性がある。

その意味では学校は常にいじめを生むリスクを抱えているといつてよい。では、学校はどう対応していけばよいのだろうか。

それは、いじめ早期発見・早期解決、防止のみならず、豊かな人間関係を築き、良質な集団をつくること、これこそ回り道のように見えるが、実はいじめを起こさせないための最短の方法である。そのためには、いじめのない集団を超える、「みんなが仲良く高め合う集団づくり」についての明確な理念にもとづく教育方法をもたなければならない。

そんな中、私が常に教育の問題を考えるバックボーンとし、実践的手法を生み出す源泉としてきたのが、岡山大学名誉教授高旗正人氏提唱の「自主協同学習」である。

「自主協同学習」は、教育理論である。授業や生徒指導はもちろん学校におけるどんな問題にも機能しなければ教育理論とは言わない。もちろんいじめの問題にも十分機能する。

今、「協同学習」はアクティブ・ラーニングの浸透により、その実践の中核としてどの教師もとりに組んでいる。その協働的な学習過程は良質な集団づくりのプロセスでもある。

「自主協同学習」に基づく実践により、いじめを生まない望ましい集団ができていくことは、経験の上からも明らかである。しかし、いじめには個人的な要素もあり、それで絶対起きないとは言い切れないが、少なくともその実践で培われる「協働的な集団」と「協同の心」はいじめを根絶するにはどうしてもなくてはならない要素である。

1 いじめの問題をどうとらえていくか

(1) いじめはどんな集団でも起きる可能性はある ～その備えは常に必要～

① なぜいじめはどの集団でも起きる可能性があると言われるのか

いじめは集団の中で起きる。集団の人間関係はいくら強固に見えても、ちょっとしたきっかけ(たいていは悪口)があれば簡単に崩れ、それは容易にいじめへとつながってしまう。

一般に「耐性が弱い、公德心や正義感に欠ける、相手の心の痛みがわからない」と言うような負の人格的な特性をもつと言われていた今の子どもたちが、ふだんの生活において限度を超えるストレスがかかったときには、そのはけ口をクラスで一番弱い子(先生に言いつけず泣き寝入りをする子)や特定の子(金ずるになりそうな子)に簡単に向けてしまう。

また、相手と利害が衝突した時には、自分はさておき相手を恨み、たいていは同調者を集め、簡単にいじめに発展する。自分中心で相手の気持ちを考える想像力などは全く欠如している。これら旧来からのいじめの構図は、依然として今も続いている。

さらに、特にその子がいじめる理由がなく、遊びやふざけの延長からいじめが始まっていたという事例も多くある。

現実には、仲間の中で“パシリ”と位置づけられている子や、決まった仲間を「いじる」という行為はすでにいじめが始まっているという認識が必要である。

そして、いざいじめが始まると、そのうちに「被害者はいじめられて当然」という理由が後からつくられ、その雰囲気が増しに強くなり、そこにいる全員が参加することを暗に強要される中で、いじめが正当化されていく。

また、家庭の教育力が低下してきていると言われるようになってから久しい。高旗正人氏は、「家庭の教育力が低下したのではなく、家庭教育の中身や質が変わってきたのである。昔は、『人間として大事なしつけ』を優先していたが、今は『勉強を中心に他人を押しつけて生きること』を教えるような家庭教育が見られるのである。

それは結果として受験競争をあおり、親の期待に応えられなくなった子どもにストレスを与え、いじめや不登校を生む大きな要因にもなっている」ということを述べている。

これらが、いじめがどこでも起こりうる主な理由と考えてよい。

② 集団のリーダーである教師にはどんな心構えが必要か

上のような状況を鑑みた時には、集団があれば、大なり小なり、そこでの人間関係のトラブルは起きると思わなければならない。自分の学級ももちろん例外ではない。

もしもトラブルが起きても、すぐに仲直りできたり、みんなの話し合いで解決できればよいが、子どもたちは一般にその経験やスキルに乏しいのが現状である。

そのトラブルが1対1や同人数の複数対複数の時は互角であり“ケンカ”で済むこともある。しかしそうではなく、そのトラブルが、大勢対1になった時や1対1でもはっきりとした力の差がある時には、たちどころにそれはいじめとなり、あっという間に集団全体に広まり深刻になる。

教師は、今は平穏な学級に見えても、いじめは「今のところ見られないが、いつ起きるかわからない」という謙虚な態度で常に備えていることが必要である。

安易な態度や傲慢な態度での学級づくりでは、いじめの土壌がつくられ、いつの間にかいじめが発生し、教師が気付かないうちに、深く潜行していくことは十分に考えられる。

③ 「集団いじめ」発生の基本メカニズム

いじめの発生は、最初は1対1のいじめであっても、早期に発見し適切な指導が行われないと、周囲の者を巻き込んだ深刻な集団いじめへと発展する。

学級内のいじめは、中心的グループに属する子が、孤立傾向の子や気の弱い子(先生に言わないことを担保できる子)に対して、嫌悪感や敵愾心などの感情をいだいたその時、

自分の欲求不満のはけ口として、その子に対して攻撃的になり、グループの取り巻きメンバーがこれに同調するとともに、学級内の他の子に対し、「いじめの強要」が行われる。

そのため、大多数の者は自分を守るため、当初は見て見ぬふりをする傍観者となるが、やがてはその不安定な立場に耐えられなくなり加害側に立っていく。

そして誰も被害者を助けず、結果として1対大勢となり「学級ぐるみのいじめ」になり、やがて被害者には誰も声をかける者がいなくなり追い詰められていく。

かつては、「いじめっ子」、「いじめられっ子」、「同調者」、「傍観者」の構図で説明されていたが、今は「一人」対「クラス全員」の構図に容易になってしまう。

④ 誰もが被害者にも加害者にもなりうるが、経過や構図が変わってきている

誰もが被害者になり、加害者にもなり、いつのまにかいじめに巻き込まれているのが現代のいじめである。それは、いじめの中心的な加害者の気まぐれやその時の気分で、ターゲットが簡単に変わり、いじめが延々と続いていくことがその典型である。

情報機器の発達がその状況を急速に後押し(簡単にターゲットを変える連絡ができる、あっという間に情報が広まる、罪悪感をほとんど感じない)していつている。

それまでの被害者はそれを待っていたかのように、喜々として加害者になっていくこともある。加害者と被害者は簡単に入れ替わるのである。ひとたびクラスでいじめが始まれば、誰もがどちら側かに入ってしまう、立場の不安定さに耐えられないのである。

いじめの傍観者でいることは、事実上難しくなってきている。いじめがまかり通る学級では、必ずどちらかにいなければならなくなっていく。

したがって、誰も積極的に被害者になる者はなくみんな結果として加害者になっていく。

(2) いじめ問題の深刻さ

① いじめは、「時には命にかかわる」とずっと言われ続けている

「子どもが自殺するのは、子どもが弱いからではなく、現代のいじめがそれほど残酷だからである、“教室の悪魔”とでも呼ぶしかない力がクラス中に猛威を振るう“地獄”である。」(『教室の悪魔』より)

いじめによる自殺の問題が公になる度に、全国のどの学校も教師も決して他人事とは思えず、そこまで追い詰められ、誰も助けてくれなかったという自殺した子の思いを深刻に受け止め、心を痛め、絶対にあってはならないと決意する。

それは、自殺までの経緯が報道されるにつれ、それと似たようなケースをどの教員も体験し、いわば自分の学級や学校でも起きかねないと、その時ほとんどが思うからである。

しかし、“のど元過ぎれば熱さを忘れる”という例えにもあるように、残念ながら時間の経過とともにだんだんとその気持ちが弱くなっていく。

この問題は、よく言われる「経験から学ぶ」ことや、「失敗から教訓を得る」ことが絶対に許されない問題であるということを常に肝に銘じておかなければならない。

以前から強調されているように、「いじめは命にかかわる重大問題だ」という高い意識を、教育行政関係者や教師ばかりではなく、社会全体で持続させることが強力ないじめ防止となることは、疑う余地はない。

② いじめによる自殺後には、その周囲にどんな困難が待っているか

いじめによる自殺後の被害者の家族の心情はマスコミ報道や見聞でしか知る由もないが、その悲惨さや苦悩は想像を絶するものがあり、それは生涯続いていくのである。それを我が子に置き換えた時にはじめて、その悲しみに少しは近づくことができる。

また学級担任を初めとする学校関係者も後悔や自分を責める気持ちがずっと続いていくに違いない。どんなに償おうと思っても、その術が存在しないからである。

ところで、いじめ自殺については、やや個人的な見解になるが、もう一つ大きな問題がある。いじめの被害者は、「自らの死をもって抗議すること」が、加害者や周囲の者に対

してどれほどのダメージを与えるかを、ますますエスカレートしていくメディアの報道から少なからず学習していることである。

最近も、新潟県のある高校で嫌がるあだ名や悪口などで高1男子生徒を自殺に追い込んだとされる加害生徒3人(遺書はないが、いじめられている途中で担任に名前を出して相談していた生徒)とその保護者が、遺族に涙ながらに謝罪をしたという記事(29.1.16 新潟日報朝刊)の中で、謝罪を受けた父親は「息子がどれほど学校が嫌だったかわかるか」、「謝罪されても許すことはできない。息子が帰ってくることもない。ただ、息子には聞いた話をそのまま伝えた」とコメントしていた。それは当然と後押しをする読者の投書も載っていた。(29.1.22 日報)何と尝试してみようもない、加害者はこの事実を生涯抱えていくことになる。加害者として名指しされた者の、その後の人生の悲惨さは推して知るべしである。

それを考えると、いじめは時に、被害者とともに加害者の人生をも奪うことになるのである。いじめは、これほどの結末になっていくこともあるのである。

これらは、いじめ自殺報道の負の部分と考えられるが、私たち大人は、それをメディアの責任にするのではなく、彼には最悪の選択肢しか残されていなかったほどに追い詰められていたことに責任を感じ、その死を重く受け止めていかなければ何の教訓にもならない。

③ いじめに限っては“雨降って地固まる”という関係になることはない

いじめの防止は、もはや対処療法では済まなくなってきた。いったん起きてしまった深刻ないじめは、その対処療法がいくら優れたものであっても、とりわけ被害者に必ずその後遺症が現れ、ひどい時には何年どころか、生涯尾を引いていることも珍しくない。

中学校での対人関係のトラブルの根は小学校時代のいじめにあった、ということは珍しいことではなく、むしろそれが必ずあると考えてもよいくらいである。

当時は、いじめを解決すべく学校も教師も努力し、当面の解決は見たはずである。

しかし、被害者が本当に納得しその謝罪を受け入れ、また加害者が心から反省する解決にはなっていなかったのである。

そして、深刻ないじめを受けたほとんどの被害者、とりわけその保護者の心情としては、相手からの謝罪の言葉だけではなく、加害者にも自分達と同じみじめな思いか、それ以上のつらい思いを味わわせなければ解決にはならないという、“復讐の念”を充足させることで解決をすることを考えているからである。一般的には、加害者の長期にわたる出席停止や施設送致、転校などを要求してくるのである。

例は不適切かもしれないが、家族を殺された身内はどんな場合でも犯人が「死刑」になるまで満足しないという心情に似ていて、誰もそれを否定することはできないであろう。

しかし、そのレベル(復習レベル)での解決は教育の現場では全く不可能である。実際にその要求を突きつけられた時の学校や教師の苦悩は並大抵ではない。したがって、いじめの問題がいつまでたっても解決をみないのはこの点にある。

他の問題やトラブルでよく言われる、「雨降って地固まる」という和解は、ある意味双方が対等の立場で対立していた時の話である。

いじめだけは、一方的な力関係の中で起きていただけに決してそうならないことは、経験上ははっきりしている。“いじめ”にまで進んだトラブルは本当には、決して解決しないと考えなければならない。だからこそ、絶対に起こしてはならないのである。

④ 被害者の受けた心の傷は、生涯にわたり人格形成に影響を与えていく

メディアに取り上げられる有名人が過去を語り始めると、決まって、小学校や中学校時代にいじめられたという話がでてくる。それも細部にわたって克明に覚えている。

学校時代の他のことは忘れても、いじめられた体験だけは何十年たっても絶対に忘れないのである。

加害者はとっくに忘れていても、被害者にとっては、それだけ深い心の傷になり、ひどい場合はトラウマになっていることがある。これがいじめの現実である。

彼らは、それを乗り越えたことを言い、それがあったから今があると言った話をするこ

ともあるが、決してよい体験だったとは言わない。

あるボクシングの元世界チャンピオンは、中学校時代のひどいじめで人間が全く変わり、強くなって加害者を見返すことがボクシングを始める動機だったと言い、そして、いじめた人間は未だに絶対に許さない、これからも許すことはないと断言していた。

これらは有名人だけの話ではない。普通の人たちにとってもその心情は全く同じである。私たちはこのいじめ被害者の厳しい現実や苦しい心情を常に心にとめておく必要がある。

⑤ いじめの解決に向け、必ずやらなければならないことは、正確な「事実確認」である

いじめの解決には、まず加害者を特定し、直ちにいじめを止めさせることであるが、次には、どんないじめの事実があったかを克明にたどり明確にすることがその始まりになる。

そこがもしいいかげんであったり、少しでもごまかしがあったりすれば、被害者は決して納得し解決に向かうことはない。いじめの問題がいつまでも尾を引くのは、ここが不十分だからである。

いじめの問題が起きた時に、被害者の保護者は異口同音に何をおいても“学校で何があったのかを正確に教えて欲しい”と要求してくる。当然であり、謝罪などは後回しである。

学校はまず総力を挙げてこのことに取り組まなければならない。

時に、小学校で行われることがある、「加害者を一同に集めて事情を聞く」などは言語道断であり、そこでの言動はボスが支配し、他の者はボスの出方をうかがいながら、一端そこで口にしたことは、たとえウソや間違いであっても、それから先、改めることはほとんどなく、問題をよりこじれさせる元になる。

また、そこに「被害者を入れて確認をしながら事情聴取を進める」に至っては、その場所にいるだけで、被害者の苦痛や苦悩は計り知れなく、正確な事実も出てくるわけがない。

それはもはや犯罪的な行為で、いじめの問題、とりわけ被害者の受けた苦しみを何も分からない自分勝手な教師による、被害者への更なるいじめと言えるのである。それは、決して起こしてはならない人為的な「二次災害」である。

ところで加害者は、個別に事情聴取を行ったにしても往々にして当初は「過少申告」をすろと思わなければならない。人間は誰でも、自分に不利なことや不都合なことは言いたくないのはしかたのないことである。

教師はそんな中で、時間はかかっても、できる限りねばり強く正確な事実を把握していく努力をしていかななければならない。職員による協力体制と必要な人員確保が重要になる。

加害者に対しては、「今は反省の言葉や謝罪の言葉は必要ではなく、事実を正確に正直に話すことが反省であり、謝罪の気持ちを表すことであること」をして強調したい。

事実私は、このことができれば、指導の9割は終わったと考えている。これをベースにすれば、次の段階へは、比較的順調に進んでいくはずである。

事実確認が不十分であるならば、その後の指導には何の効果もなく、加害者には、むしろごまかすことを教え、かえって害になっていく。被害者も更に傷を深くしていく。加害者を特定した直後の、多くの職員の協力による的確な対応が問題解決の鍵を握るのである。

⑥ 時に加害者も大きな傷を負い、家庭が壊れることもある

いじめ問題の解決は加害者の特定と事実確認から始まり、それがいかに重要かは上で述べた通りである。

しかし、学校はそれからが本当の解決と指導が始まり、教師や学校の力量が試されることになる。被害者への対応については、彼の心情に徹底的に寄り添いながら、コミュニケーションを重ね、彼の満足する解決に向かい、再び安心して明るい学校生活を送れるようにしていくことがその基本である。

一方、加害者もよくない行為をしたとはいえ、同じ学級(学校)で、その子の成長に責任をもたなければならない子どもである。

まれに、教師の指導が全く心に響かず「良心のかけらもない」のではないかと思える子がいることもあるが(専門家からの助言も得ながら個別・特別な指導が必要であろう)、大

抵の子どもは、深く考えずにいじめを行ったりしていることもあり、そういう事態が起きてはじめて事の重大性に気付く、その精神的なショックは極めて大きなものがある。その事実はすぐに保護者にも知れるところとなり、そのショックは倍増されていく。

とりわけ匿名(ネットやもの隠し、落書き等)でいじめてる者は、直接的にいじめている者に比べ小さな者が多い。いじめが分かった時の精神的なケアを怠ることはできない、ただ叱責すればすむということではない。

バレないことを前提にいじめていた者が、その現場を目撃され言い逃れができなくなり、追い詰められた末に、不登校になってしまった例もある。

また、被害者の保護者の要求があまりに厳しく、母親一人では耐えられなくなり父親が単身赴任をやめ帰ってきた例を知っている。(結果的に父親は会社をやめることになった)

しかし、匿名によるいじめは加害者が特定できないまま終わってしまうこともある。そうなった時には、彼は特定されなかったが故に、生涯その心の痛手、わだかまりを負ったまま一生生きることになる。他人はごまかせても、自分をごまかしたり、自分にだけはウソをつくことができないことから、ことあるたびに、自分を責めることになるであろう。

他方、それを全く忘れてしまい、何事もなかったように平然と生きていく人生があるとすれば、それこそ大きな心配であり、いつかは深刻なしっぺ返しがかかることは容易に想像できる。教育者としては、決してそうあってほしくないと願っている。

(3) 学校における子どもを取り巻く厳しい現実

① 子どもはいつの時代でもダブルスタンダードの中で生きている

子どもは、教師が守ることを期待し、あるときは強要している「望ましい社会規範」と仲間内の“オキテ”の狭間で毎日息苦しさや悩みを感じながら生活している。

いじめを先生に告げることは、社会一般のルールでは正義の行為であるが、子どもたちの規範の中(オキテの世界)では“チクル”と言い、卑怯で「最悪」の行為となり、集団による厳しい制裁が待っている。

その告げ口がわかれば、たちどころによりひどいいじめの対象者になる。いじめの首謀者たちは、制裁があることを仲間内に公言し、あるときはそれを実際に見せることで、自分たちを守りいじめを継続していくのである。普通の子どもたちに、それを超えてまで正義を貫くというのは、極めて酷な話で、到底子どもを責めることはできない。

また、特に女子のグループは、たいていはよからぬ秘密を共有することで結束を保っている。(たいていは誰かの秘密やひどい悪口、悪だくみである)それを他に漏らしたことがわかると大変なことになる。あっという間に仲間を外され、一気に追い詰められていく。

そのため女子はグループの考え方や約束が社会的な善悪の判断を超え、自らの思考や行動の判断基準となり、同一グループ内では、積極的な同調行動がみられる。女子はグループから外され、孤立することを何より恐れ、恥と考えているのである。

このように子どもたちはダブルスタンダードの中で常にジレンマを感じながら生きている。いじめが発生する集団は、正義や社会のルールが通る公正な集団ではなく、彼らが共有している“オキテ”が完全な優位を保ち、それが集団を支配している状態なのである。

② 集団の中に居続けるには、本当の自分とは違う個性を演じる必要もある

最近の子どもたちは、本音をぶつけ、多少の対立があってもそれを解消しながら仲良くなっていくような面倒な友だち関係を嫌う。とりわけ正義感の強い子や個性の強い子は仲間から疎んぜられる。

それだけに、互いの対立がなく、集団の中で摩擦のないフラットな関係を求めようとする。そして軽く当たり障りのない付き合いで満足する。その雰囲気合わなかったり、その集団の空気が読めなくなれば、たちどころに仲間から外される。

特に女子は、仲間の中で「キャラがかぶる」ことを自ら避けようとすると言われている。仲間は主に、リーダー格、サブリーダー、ボケ役、ツッコミ役、天然といったキャラで構

成され、いわばそこでの“ノリ”の善し悪しが仲間に評価されていく。

それが本当の自分とは違っていても「固定して演ずる」ことが、集団の中で生き残る術である。そんな世界では、仲間付き合いに“疲れる”ことは容易に想像できる。

結果的にそれができない子がいじめの対象や、不登校になったりする。大人にはなかなか理解できない子どもの世界である。

③ いじめはしたたかに、しかも巧妙に行われる

はっきりとしたいじめは、教師の見えるところでは絶対にやらないだけに、いじめられている者が教師に助けを求められない状況になっている。しかし級友は全員が知っている。

もちろん友だちも、自分の身を守るために被害者を誰も助けない、ある意味での加害者になってしまっている。被害者はだんだんつらく苦しい状況に追い込まれていく。

また最近の子どもは、持ち前の柔軟な発想を駆使し、あらゆる残酷な「いじめ」の手口を開発したり、実際にいじめていても、それを指摘された時には言い訳ができるようなしたたかな計算をしながら、また、あらゆるメディアや通信ツールを使い大人顔負けの巧妙なやり方でいじめを実行している。

その典型は、互いの目配せなどで、その子が入りにくい雰囲気を瞬時につくり、無視を周囲に強制する「空気によるいじめ」である。教師に注意をされても、私たちは何もしていないと必ず言う。ターゲットにされた子どもは、これほど切ないことはない。

④ 学級で出来ている階層(ヒエラルキー)は、教師がつくっていると言ってもよい

学級の子どもたちの中には「ヒエラルキー(“学級カースト”と著作の中では呼んでいる専門家もいる)」が存在するという指摘が何人かの研究者によってなされている。

事実、ひどい学級では発言も学級のボスの暗黙の許可を得てから行ったり、最下位層の子どもは勝手に笑うことさえ許されないという、全く非常識な実態もある。

小規模校において「人間関係の固定化」で説明されている問題も、実は人間関係(元来はもろいものである)が固定しているのではなく、集団における地位構造、もっと言えば上下関係が固定化しているととらえていくことができる。これらは、間違いなくいじめを生む土壌になっていく。

しかし、それはあたかもどの学級にも自然とつくられるかのごとく言われているが、それは間違いである。

そうになっている学級は、たいていは、教師が無用な競争原理を学級に持ち込み、学級に「勉強のできる者とできない者」、教師の都合で子どもを困る評価の物差しだけを用いている結果「教師のお気に入りの子とそうでない子」等の「表の階層」を教師がつくりだしている。(もちろんそのことに気付いていない教師がほとんどであるが。)

そのため、そのアンチテーゼとして、「裏の階層(カースト)」が出来上がっているとみることが自然であり、事態を容易に説明することができる。

弱い子こそ大事にされみんなが活躍する支持的・期待的な人間関係や風土がつけられている学級では、そのような階層の分化、ましてや学級カーストなどはみられないと断言することはできる。

(4) ますます指導が難しくなってきた最近のいじめ

これまで学校では、見るからにいじめられやすい特徴(だらしがない)をもち、できれば一緒にいたくない子、そしていじめを先生に告げない子がいじめの対象となっていた。

他にも「不潔」、「動作が気持ち悪い」、「性格が自己中心的」あるいはまた、被害者が非難されても仕方がない行動、例えば「ウソをつく」、「勝手に約束を破る」、「他人の悪口を言って回る」などの行動をとった場合も同様である。

さらに、最近では「その場の空気が読めない」と言ったこともいじめの対象になっている。そのようないじめは比較的に見えやすく、また加害者もよくないことをしているという自覚もあるので、事実が明らかになった時には比較的指導がしやすい。

しかし、昨今のいじめはとうてい一筋縄ではいかないものが増えてきている。それは匿名や自分を安全地帯に置たいじめの横行であり、加害者を特定した後の和解の難しさ、両者への指導の困難さである。

① 匿名だが、ほぼ相手がわかっているいじめの蔓延

加害者は、いったんターゲットにした子に対し、ネットやラインへの書き込み、靴などの物隠し、落書きなどで相手を徹底的に追い詰めていく。

自分を安全地帯においての匿名によるいじめである。その手口は陰湿さを増し、証拠を決して残さないだけに教師による問題の解決や指導がきわめて困難である。

このような問題の解決には、警察ではない学校は、子どもの良心を一番の頼りにするだけに、そのことの限界をどの教師も感ずることになる。(いじめている最中には、教師の訴えはその子の良心には届かないと考えなければならない)

もし教師が確たる証拠もなく特定の子を疑った時には、実際の加害者であればあるほど、それを待っていたとばかりに、家族ぐるみで学校に対しての敵意や不信感をむき出しにし、無理難題を言ってくる。

しかし一方、被害者はほとんどの場合、ふだんの学校生活から加害者についての心当たりがあるだけに、もどかしさと共にその悔しさは倍増している。

この種の内じめは、被害者とその保護者は学校が加害者を特定し、単なる謝罪ではなく処分や制裁(出席停止や転校など)を与えない限りは解決したと納得することはない。

もしそれが未解決ならば、不安な気持ちや悔しさ、学校への不信感がいつまでも続き、安心して学校へ来ることはできなく、不登校状態に追い込まれることも珍しくない。そして、その悔しさ、恨みは生涯忘れることはないのである。

② 匿名でも稀に加害者が特定された場合の、その後の指導の難しさ

ところで匿名でも、稀に加害者が特定されることがある。本人からの申し出や他からの有力情報などは、教師がいくらその努力をしようが、残念ながら期待出来ない。発信元のパソコンやスマホの特定をした程度では、自分を調べる相手が教師ならば、加害者はしたたかに“シラ”を切りとおす。

言い逃れができないのは、例えば靴を隠そうとして被害者の靴を持っている“現場”を教師が目撃し、押さえた時くらいである(言葉は悪いが現行犯)。

私は、今のところそれしか加害者を特定する方法はないという認識をもっている。全教師が協力して足でかせぐしかないのである。

そして仮に加害者が特定できたにしても、いじめがそれで解決するわけではない。むしろ難しいのは、その後の処理や指導である。

匿名でいじめをしている子の、“匿名”でやっていたことが表沙汰になってしまった”というショックは教師の想像をはるかに超え、当初は平常心で話を聞けないような状況になることも多々ある。

相手が子どもであるだけに指導の過程で、ただ問い詰めたり、厳しい叱責を行った時には、彼を辱め、追い詰めることになり、学校へ来れなくなってしまうこともある。

また、自分が行った行為はさておき、その後の厳しい指導や被害者からの情報のみでの事実認識(加害者も相手の方が悪い、原因をつくったのは相手にある、やられたからやり返しているだけ等と主張こともある)に対する学校や教師への抗議や反対の意思を、欠席や教室へ入らないことで表す手段も十分に心得ている。

彼は欠席で巧妙に問題をすり替え、教師も保護者もそのことに目がいってしまい、問題の本質を見誤ることもしばしばである。そして、その状況が本格的な不登校のきっかけとなり、教師や学校の対応の悪さを理由に、長期の不登校に陥ってしまうこともある。

このことについては、それまでの他の事例を参考にしたり、本人や保護者の状況をよく観ながら慎重に対応し、担任だけではなく学校としての判断を行いながら、決して「二次災害」のようなものが起きないように、心して取り組まなければならない。

③ 「いじり」という巧妙ないじめの手口の流行

これまでのいじめは、人間関係ができていなかったり、対立している関係の中でいじめが発生することが多かった。

しかし昨今では、一定の人間関係をもつ仲間集団の中にいじめが入り始めている。加害者は、弱くからかい甲斐のある子を冗談めかして、遊び感覚でいじめ、グループの笑い者にして楽しむのである。マスコミ言葉で言う「いじり(いじめの偽装・隠蔽)」という感覚で行われる。

子どもたちは、芸人はそれが自分の役割でそれを演じていることを見抜けないでいる。また、被害者もいじられることにより、とりあえずは集団に所属していられるので、無理にでもそのキャラを演じざるを得ない状況になっている。

また集団の中では、いじる対象を定期的に入れ替える「回し」があり、外から見ていると仲良しグループにしか見えない。

したがって、それは深刻ないじめだと指導しても、加害者の方にその感覚がないので指導がとて難しくなっている。

これは、かつて中学校でみられたツッパリグループの中の「パシリ」と呼ばれ、脅し(誰かに告げたらますますひどい目に遭わせると刷り込む)と暴力(言う通りにしない時は痛い目に遭わせる)を背景に、使いつ走りを始め、家からお金をもってくることなど、何でも言うことを聞かされていた、グループの中で一番弱い子(絶対に先生に言わない子)、一番切ない思いをしていた子の役割と、その構図がとてもよく似ている。

④ ツッパリグループのあるところには、必ずと言ってよいほどいじめが存在する

今も昔も変わらずに、ツッパリグループのあるところには、必ずといってよいほど“かつあげ”を中心とするいじめがあると考えなければならない。

なぜなら彼らは仲間内の結束を保つために、グループで“つるんで”飲食したり遊ぶ金が必要だからである。したがって、いわば資金源とされている子が必ず必要なのである。

もちろんそのターゲットはグループの規模により一人では足りず、時には学年を超えて複数いることもある。

資金源とされた子は悲惨な学校生活を送っており、最優先で救い出さなければならないにもかかわらず、教師の関心はグループ生徒の表面上の荒れや問題行動、非行に向き、あるいはその対応に追われることになり、通常はその悲惨な現実に気付かず、被害者からの申告がないことをもって対応が遅れるか、全くなされないでいる。

学校が荒れていると言われる状況の時には、声を上げることはできないが、一刻も早い助けを待っている子が必ずいることを忘れてはならない。このことは、どの教師もしっかり心得ておかなければならない。

現に行われているいじりも、もしかするとそのレベルまでエスカレートしていく可能性も十分考えられる。教師の指導で早く止めてやらなければならない。

⑤ 中学校では、女子の仲間外しがもっとも深刻である

中学校では、女子の仲間外しが大きな問題となっている。今は友だちをもつことがファッションの時代になっていて、友だちの数でオシャレを競っている面がある。

女子の仲間内の世界では適度な人数の友だちがいないことは、最も恥ずかしいことで、仲間を外されることが何よりの屈辱であるという共通認識がある。

数年前に問題となった大学でのトイレ食(一緒に食べる友だちがいないことを隠す)もその延長と考えることができる。それだけに、大人とは全く違った感覚(ノリが共有できる)で仲間をとらえていて、仲間から外され孤立することを何より恐れるのである。

いつ人間関係が変わり、いつ仲間を外されるかわからないという恐怖から、かぜを引いても学校を休めないと言っている子も実際にいるくらいである。

ところが、この仲間外しは、加害者たちはただ気が合わなくなっただけだとし、いじめだとは認めていないが(しかし相手に与えるダメージの大きさは十分にわかっている)、被

被害者は、加害がつての仲間だっただけに、ひどいいじめを受けていると感じ、耐えられないと思っている。

加害者は集団の力でその空気はつくるが、直接的な行為や言動は見えないだけにとっても指導が難しい。教師の指導に対しては“干渉”だと反発し、開き直りで対抗する。

⑥ 「仕返しいじめ」は、保護者はむしろ当たり前と考え、子どもを応援する

指導が難しいいじめに、これまで自分たちがいじめられていたことに対する「仕返しいじめ」がある。中学校では往々にしてみられる。

小学校ではボスとして君臨し、周囲に取り巻きを置き、自分の気に入らない者をいじめていた子が、周囲の子どもたちの精神的な成長と新しい仲間関係の中で立場が逆転し、その恨みを晴らされるような、報復いじめを受ける場合が珍しくない。

その指導で困難なことは、加害者側の保護者の理解を得ることである。一部保護者は、「子どもの気持ちを考えれば当然のことで、やられたことをやり返しているだけでむしろまだやり足りない、悪いことをしているわけではない、これでようやく自分の子どもが受けた心の傷が少しは癒やされた」という主張をすることで実際に目にしたことがある。

その時には、それは子どもだけの問題ではなく、親自身も当時の切なさ悔しさを晴らすチャンスがようやく来たと考えているのである。裏を返せば、いじめはそれほどの深い傷を母子の心に与え、人格さえも変えたのである。

保護者の考え方が変わらなければ子どもの指導は到底できない。その時には、まず1対多という人間関係の構図はいじめの構図であること、過去に自分が受けていようと、それを再び「いじめ」という卑劣な手段で報復することは人権上許されないこと、それは自分自身の心を深く傷つけ、やがては後悔するようにことになること、その子の人格の健全な発達には大きな害になることなどを粘り強く話し、理解を求めていくしかない。

(5) 指導に困難を極めるメディアによるいじめ

① メディアによるいじめの怖さ

メディアを利用した誹謗、中傷、噂話は、本人の知らないところですさまじい勢いで広まる。内容は、仮に真実であるにしても本人が必ず否定する話題である。

本人が否定すればするほど面白おかしく話がふくらみ、気がついたら教師にまで知られ「問題を起こした子ども」として指導されることもある。

教師に「それは嘘だ」と言っても、それを証明することは不可能に近い。すると、やがて親にも知られ、責められ叱責され、家中が暗い雰囲気になっていく。

都市や農村を問わず、いづれどんな子どもの身にも降りかかる可能性のある事例である。いや、子どもばかりではなく、われわれ大人も全く他人ごとではない。

② ネットいじめによる被害者の苦痛

ネットいじめの被害者はこれをいじめとは言えないつらさがある。言えばもっとひどい噂が流される。何より、このパターンはよほど悪質(殺すなどの文言がある)でない限り、警察は加害者を特定してくれない。だから加害者は、自信をもって知らんぷりをする。

自分の知らないところでいったいどんなメールや写真が流されているのか、どれだけの人間が見ているのか、次はどんなメールや写真がでるのか、誰も自分の味方ではなく、誰も自分を信じてくれない、そんな人間不信の状況になっていく。

ネット上の情報(主にプライバシーにかかわる写真や文章)は、そのことに気づいた時のショックは大きく、広く公開され、また半永久的に残るため、面と向かって攻撃されるより大きな精神的苦痛を伴い、被害者は精神的に追い詰められていく。

③ 加害者がほぼ特定できても、どうしようもできない

ネットいじめは、被害者からみれば、内容や画像で特定はできないまでも、ほぼ加害者

がわかっていることが多い。仲間内にしかさらしていない情報が流れるからである。

しかし、誰かまでは完全に断定できなく疑心暗鬼になってしまう。加害者はたいていは、いじめという感覚はもっていない。それだけに被害者と加害者の立場は簡単に入れ替わる。

相手の嫌なことや触れてほしくないことを無神経に“ズケズケ言う”という感覚は、メディアの利用によってその勢いをますます増している。このままでは、将来の社会生活を考えた時には恐ろしいことになる。

ところで被害者は、メディア上の自力検索で加害者にたどり着くことはほとんど不可能であり、よほどのことがない限り、警察などの専門機関は動いてくれない。

今のところそれを防ぐには、残念ながら、一人一人のモラルや良心に期待し、早く自分のよくない行いに気づき、自らの意思をもって改善していくしかない。

そしてその根本となることは、その元になっている生身の人間関係の改善や健全化に努めることである。

そして仮にトラブルになることがあっても両者が折り合い、後に尾を引かないような解決スキルを身に付けさせていきたい。

④ スマホのラインの危うさ

最近のスマホのラインと呼ばれるものは、メール感覚でグループ会話ができるため人気があるが、メッセージを確認したかどうか、「既読」表示によって分かる。

したがって読んだらすぐに返信しなければならないという観念に縛られるだけでなく、「既読」なのに誰からも返信がこなければ、無視されていることがわかってしまう。それは、グループ内の「閉鎖空間」で行われるので、外部にはわかりにくく、いじめや非行、性の逸脱行動の温床やになることは容易に想像できる。

それと同時に、四六時中スマホを手放せず、お風呂場にまで持ち込むようなスマホに支配されているような生活が続くことは、子どもたちの生活にとっての大問題である。

保護者を巻き込んだ地域ぐるみでの対策が必要である。現在よく行われている、“ノーメディアデー”の実践などを地道に続けていってほしい。

2 教師は何をしていけばよいか

いじめのない学級をつくるには、目指すゴールとして「一人一人が活かされ、安心して学習や生活ができる、みんなが仲がよく高め合っている集団をつくること」になるが、しかしそれは口でいうほど簡単ではない。

その成長過程でいじめが起きることもある。したがって教師は、いじめに対する適切な対処療法と、いじめを生まない学級づくり(根治療法)の両方に長けている必要がある。

(1) どうしても教師がいじめを見つけたい

いじめられている子どもは、自分からは言えないけど、自分がいじめられていることをわかってほしいと痛切に思っている。大人に一刻も早く気づいてほしいと願っている。

教師が、被害者や保護者からの申告でようやくいじめがわかった時には、事態が相当深刻になっている。

また、他からの情報でいじめが発覚したときには、加害者から情報提供者を守るために(加害者は必ず突き止めようとする)は長期に渡って膨大なエネルギーが必要になる。

① 教師の“声がけ”に勝るいじめの発見や予防はない

子どもに寄り添い、少しでも気になることがあったら教師から必ず声をかける。子どもへの教師の“声がけ”に勝るいじめ発見、いじめ防止の方法はない。どの教師も気になったどの子にも必ず声をかけてみる。結果、何も心配ないことがわあれば一番よい。

いじめで我が子を失ない、その後長野県教委に勤めていた当時の前島章良氏は「全校集会で『いじめは許さない』と訴えかけることも大切ですが、日ごろの子どもの姿を大事に

することが、いちばん重要だと思います。『どうしたの』と声をかけることが、子どもと一緒にいる大人の役目で最大の教育だと思います。教師が日ごろからの声かけを通じて子どもの心に『この先生はいつも自分のことを気にかけている。この人なら助けになってくれるかもしてない』という信頼関係を築けていたら、子どもの誤ったルールを越えて、『〇〇ちゃんがいじめられているよ』と正義の告発ができると思う。」と言っている。

② いじめの情報提供者を守るには膨大なエネルギーがいる

他からの通報でいじめが発覚した時には、被害者の救済と同じくらい全校体制で情報提供者を徹底して守り、話してよかったという結果を出さなければならない。そうでなければ正義の通らない学校になり、教師も学校も二度と信用されなくなってしまう。

しかし、いじめの加害者は、それがわかった時には、自分たちがやっているひどいことを棚に上げ、異常なくらい執拗に“誰が言ったか”にこだわり徹底して探し出す。

それは、相手が子どもであろうがその保護者であろうがその区別は全くなく、子どもであれば「チクッタ」と、すぐにもっとひどいいじめの標的とする。

保護者であれば、その子どもへの攻撃と共に「無言電話」や「中傷」などのいやがらせを行い、電話番号を変えさせるなどは序の口で、相手の家庭を崩壊させたり精神的にノックアウトするまで続けることがある。そのような悲惨なことは、何としても防がなければならない。

(2) いじめは大人が介入しなければ絶対に解決せず、安易に子どもに頼ってはならない

いじめの定義は難しい、極端に言うならば、被害者が“いじめ”だと言えれば、すべていじめであると言ってもよい状況がある。

現実的には、人間関係の構図が1対多の関係か1対1でも圧倒的に力の差がある中で、一方的に“やられている”ケースには「いじめとしての徹底した対応」が必要であろう。

しかし私は、一時的に人間関係のトラブルがあっても、早い段階で当事者同士、あるいは周囲の助けを得て解決できるものは、いじめと認定しなくともよいと考えている。

ところが、そのことが不可能であり、しかも潜行しながらエスカレートしていくトラブルは、教師や大人が見つけて積極介入し、止めなければならないのが、いじめの一番の特徴だと考えている。

いじめとはっきり認定されるものは経験上、大人が介入しなければ絶対に解決しないと断言できる。「大人が解決してやらなければならないトラブル」がいじめなのである。

いじめられている者は、そのことを自分から口に出したり訴えたりすることができず、一刻も早く大人を見つけ、救ってくれることを心から願っている。

ところで希に、教師が「このいじめは学級の問題なので、君たちの力で解決せよ」などと能天気なことを言い、話し合わせたりしていることがある。

その時には、被害者の気持ちを考えない無神経さと教師の逃げの姿勢を子どもに見透かされ、何の意味もない上辺だけの話し合いとなるばかりか、いじめはますますエスカレートし、被害者の心の傷は深くなる一方になる。

いじめに対して学級の力をつけなければならない場面も当然必要ではあるが、それは、あくまでも学級に直接の当事者がいない時の話である。

(3) 教師のいじめに対する危機意識と感性を磨いておきたい

① 教師の潜在意識のあり方が、いじめ発見に向けての大きな問題となる

“いじめにかかわって面倒になるのは嫌だ”、“自分の学級にはいじめはないはずだ”、“些細ないじめはなかったことにしたい”と教師が潜在的にでも思っていれば、いじめを見ようとしないうし、いじめは見えない。

教師の高い危機意識の持続はいじめ発見のキーポイントになる。教師は目のレンズを曇らせないように常に磨きおく必要がある。

だからといって神経質になって子どもを観るということではない。おおらかに「困ったことがあったらいつでも相談してほしい」、「先生はいつでも弱い子の味方だ」、「いつでもみんなのために骨を折る覚悟はある」というメッセージを送り続けていくことである。いつでも自分たちを観てくれる信頼できる先生がいて、困った時にはいつでも先生に相談できるという安心感は、いじめの大きな抑止力になる。上から目線で、“いじめは絶対に許さない”と声高に叫ぶよりは何倍もの効果があることは間違いない。

② 子どものふだんとの違いをすかさず察知する教師の鋭い感性は重要

昨今のいじめはとて見えにくくなっている。教師の前では平静を装っているが、影ではいじめや口封じが執拗に行われていることもある。

また特に女子は、その子が入りにくく、排除する雰囲気や瞬時につくる“空気によるいじめ”が大半を占めるようになってきている。

学校では、教師に見つからないように行う巧妙ないじめ、見つかっても言い訳ができる、開き直れるようないじめ、誰がやったかわからない陰湿ないじめが横行している。

子どもの表情や態度は毎日変わる。いじめの発見には、子どもに寄り添い、変化を敏感に察知することがとても重要になってくる。

当然のことながら変化は、彼のふだんの様子や表情を知っていなければそれを感知できるはずはない。日頃からいかに子どもに寄り添っているかが重要になる。

子どもは何かあれば必ず表情に変化が見えたり、言葉の代わりにボディメッセージを送ってくる。誰にでもわかる大きな手がかりはもちろん見逃してはならないし、線引きの難しいものもあるが、それをぜひ読んでやりたい。

受け手が優秀であれば子どもからのメッセージはどんどん送られてくる。信号を確実に受け取り、それを適切に判断し、そして“迷ったら行動”である。結果的に心配ないことを確認できればそれが一番よいのである。

※ 必ず読んでやりたい子どもからのメッセージの例 (順不動)

- ・はっきりとした理由がわからない遅刻や欠席が増えてくる
- ・忘れ物が多くなったり、よく物をなくすようになった
- ・教科書、ノート、机などに落書きがされている
- ・授業中、ボーとしたり沈んでいることが多くなり、学習意欲が感じられない
- ・学習成績の極端な低下がみえる
- ・常に友だちの目を気にしたり、特定の子を気にして、落ち着かない
- ・どことなく教師を避けるようになり、話を聞いても満足に答えない
- ・逆に、教師に何か言いたそうなそぶりや、冗談めかして何かを伝えようとしている
- ・頭痛や腹痛、倦怠感など体調不良を訴えたり、保健室へ行くことが多くなる
- ・図書館や特別支援教室などに避難している様子が見える
- ・休み時間は教務室の前や、いつでも教師の見えるところにいる
- ・チャイムが鳴ってからギリギリに教室に入ってくる
- ・体に傷やあざが見えたり、衣服の乱れがある
- ・家庭への連絡や親と話すことを極端にいやがる
- ・不自然な友人関係が見られるようになる
- ・教師の手を離れるグループ学習等、友だちと関わりながらやる学習や活動を嫌がる
- ・以前には考えられないような万引きなどの非行の出現
- ・自傷行為の跡が見える
- ・「死にたい」などのメモや書き込みが見られる
- ・集金日になると「お金を落とした」などと不自然なことを言う
- ・自分の物ではない持ち物や服をもっている
- ・登下校は、走ったり逃げるようにして家と往復する

等

③ よく観ていれば、ふざけかいじめかはすぐにわかる

ふざけているようでも、プロレスごっこなどで「やられて下になっている子」がいつも決まっている時には、それはいじめと断定してほぼ間違いはない。

また、肩をたたいているが、そのたたき方が強い、廊下を歩いていると意味も無く声をかけられたり足を出される、何かとちょっかいを出される、人気のないところでよく集まっている、グループにいつもいる子が急にいなくなった、一緒に遊んでいても何かおびえた様子がある子がいる、誰かが来ると瞬時に空気が変わる等、子どもたちのふだんの生活を観ていれば、いじめの端緒をいち早く見つけることのできる数多くの手がかりがある。

この子どもの変化をすばやく察知する能力に長けることも、これからの教師にとっての大事な力になっていく。

④ いじめアンケート調査の限界と役割

子どもへの「いじめアンケート調査」は今ほどこの学校でも必ず行われていると言ってよい。しかし、それにはには限界があることも認識しておかなければならない。

アンケート当日までいじめがなくとも明日いじめが始まるかもしれない。実名で本当のことを教師に言うには、よほどの信頼関係と勇気が必要になる。それは普通は無理である。

いじめアンケートは学校の“アリバイづくり”ではないかという保護者の投書が先日の新潟日報(28.12)に載っていた。その一面は無きにしも非ずである。

年に数回のいじめアンケートで、そこに現れてこないのが問題がないとする判断はあまりに安易であり、いじめの発見をアンケートに頼っているとしたらきわめて情けない。

ところでアンケートは、緊急の時と定期的にとる場合があり、緊急の場合はその目的は情報の収集であり、用途は明確である。

しかし、定期アンケートの用途は多種多様である。私は個人的には、いじめの発見・相談というよりも、むしろいじめに対する子どもの意識を高めたり、いじめはいずれは必ずばれるという気持ちにさせる、いじめ防止のための一つの手段と考えていきたい。

3 いじめの解決に向け、特に大事にしたいこと

(1) いじめの解決は、何をおいても「最優先」で「学校チーム」で

いじめが発覚した時には、その解決は何をおいても最優先でやりたい。しかも必ず全校体制の「学校チーム」で対応したい。このことが、被害者に対するせめてもの誠意である。

いじめが学校内で行われようと校外で行われようと、学校の子どもの間で行われたことについては、学校にも大きな責任がある。

「人は責任を感じている度合いで動く」と言われる。全職員が自分の問題として、「何故防げなかったのか」という責任を自覚することなくして、“学校チーム”での対応は絵空事になってしまう。

よく職員会議で行われている、子どもの「事故報告」や「情報交換」は何のためか。問題の解決に向けて一人一人の職員が自分のやるべきこと、やれることを確認し、協同で問題の解決にあたるために行うのである。「聞きおく」だけでは何の意味もない。

(2) 被害者を守り、その思いに応えることから問題解決のスタートを

いじめがわかった時には「いじめの本当の事実を知っているのは、被害者だけである。」との立場から、何をおいてもまず被害者の話に耳を傾け、どこまでも彼を守り、二度とつらい思いをしないような環境を整えることがいじめ解決のスタートになる。

そして、被害者が安心をして学校生活を送るために「何をしてほしいのか」、率直な被害者の思いに応えることも重要である。「加害者もある意味では被害者」などという同情的なとらえで方では、被害者は到底納得しないし、その解決もおぼつかない。

ところで、被害者とその保護者も時として、学校や加害者に対し責任を迫り、とりわ

け加害生徒に対し「登校禁止」や「転校」などの復讐的な処分を学校に求めてくることがある。加害者からのどんな謝罪でも了解することはなく、それをもって解決と考えている。その時には、学校、とりわけ校長は必ず苦境に立たされる。

しかし加害者にも人権はあるし、まだまだ成長途中の子どもである。「教育機関である学校としてできること」という点だけは理解してもらうよう努力しなければならない。

また、加害者側もバランス感覚を働かせており、自分の犯したことに見合う処罰や指導は受け入れるが、その限度を超えると判断するものに対しては猛然と反発し、その時から問題の核心がすり替わり、問題が泥沼化し解決はおぼつかないことになる。そのあたりの見極めはとても大事であり、管理職の見識が問われる場面でもある。

しかしもちろん、校内であっても明らかな犯罪行為(傷害・恐喝等)があった場合には、内部処理で済ませてならないことは当然である。

(3) 双方の保護者への対応は迅速ていねい正直に、決して情報飢餓状態におかない

いじめが発覚した場合には、双方の保護者へは、速くてていねいそして正直な対応が求められる。まずその時点で把握している事実やそれまでにどう子どもたちに対応・指導したかを正確に伝えることである。

たとえ子どもが保護者への連絡を嫌がったにしても、学校が事実を知った以上は子どもにも「問題の解決にはどうしても保護者の理解と協力が必要だ」ということ点をよく説明し、説得につとめ必ず連絡したい。もちろん頭ごしの連絡は決してしてはならない。

そして学校の、できる限り迅速な解決への見通しと、学校がやろうとしていることに対する理解を得るべく、保護者との共通理解を十分に図りたい。

たとえどのような理由があろうと保護者にとっては連絡が遅れることは許されない。学校は、都合の悪いことは隠していると思われることほど不信感につながることはない。

そして保護者と約束をしたことに対しては必ず守り、確かな協力体制を築きたい。そのことが解決への大きな力になっていく。それは、親の学校に対する態度がそのまま子どもに反映していくと考えて間違いないからである。親が学校を信頼したときには、問題の解決が早い、親が学校に対し不信感をもっているようでは、問題は決して解決しない。

そこで注意することは、たとえ解決が進んでなくとも、対応がうまくいってなくとも、「ここまで進んでいる」、「ここはまだできていない」等の途中経過の報告こそ大切である。

全部解決してから連絡をしようと考えていると、保護者は「どうなっているのだろう」という不安から、必ずと言ってよいほど不満がたまり新たな問題が起きてくる。関係の保護者をいわば、情報飢餓状態におくことはもっとも避けなければならない。

そしてさらに、学校や教師が不都合を隠したり対面を守るために、少しでもウソやごまかしがあった場合には、必ず後でつじつまが合わなくなり、“二次災害”の発生は必定である。保護者は多少のごまかしができて、真実を知る子どもをごまかすことはできない。

教師が自分を守るために事実をごまかしたりウソをついた時には、子どもや保護者の学校や教師に対する不信感は修復できないものになる。

また、真実が明らかになる前の憶測での指導や一方への肩入れ、加害者やその保護者への批判や悪口が本人達の耳に入った時などは問題をこじらせるばかりか、その問題の矛先が完全に教師や学校に向いてくる。その解決に何年も要したという例も知っている。

いわば初期対応を誤ったばかりに、問題がとてつもなく大きくなり、解決のために何倍ものエネルギーを要することになるのである。これはいじめに限ったことではない。

いじめ問題についての保護者への対応については、担任(あるいは当事者)一人の判断では行わず、必ず学校として主任や管理職の助言や指導を得ながら確実に行いたい。

(4) 問題の解決を両者の安易な手打ちでは絶対に済ませない

両者の手打ちは、いじめの解決過程の中で、時として小学校で行われることがある。加害者、被害者の双方を呼び同席させた上での安易な手打ち、つまり「儀礼的に加害者が謝り今後の行動のあり方や決意表明に及ぶ、被害者はそれを了解し、これからは仲良くしま

しょうと表面上の合意をすること」は、必ずと言ってよいほど禍根を残す。被害者は加害者の軽い態度に、本当には納得せず、加害者はこれで終わったと甘く考えてしまう。

いじめが発覚した直後の事情聴取は言うに及ばず、謝罪の会においても加害者が複数同席しているなどは論外である。その場合はすべてボスや中心人物がその場の空気をつくり、他は彼の顔色を伺い、その意向に従うだけとなり一人一人の意思などは無きに等しくなる。

そして、それまでの卑劣な行為の責任を感じる度合いは、「自分だけではない」という気持ちが増幅され、そこにいる人数分の1となり、被害者の気持ちを逆なでする。

集団によるいじめは、被害者の恐怖や苦悩を考えた時には、その人数分の倍数の責任を感じてほしいのである。それならば被害者も少しは納得する。

教師として加害者には、どうしても謝罪したいという気持ちになるまで、自分のやった行為と自分自身を徹底的に見つめさせたい。それには、いじめに至ったプロセス(事実)を始めから現在までを正確に振り返らせ、事実の確認に合わせ、そのポイントとなった時々の気持ちを文章で表してみることはじめさせたい。教師はそのことが十分に行えるよう関わっていききたい。

このことは保護者同士の関係においても同じである。早期の謝罪会などはほとんどセレモニー化し意味をもたない。自分の子育てを振り返るための時間と心構えが必要である。

また、とりわけ加害者の保護者は相手への心からの謝罪の気持ちではなく、早く問題を終わらせ、自分も楽になりたいことから謝罪を急ぐ傾向にある。そんな気持ちから謝罪を受けた被害者の保護者は、その気持ちを察知することで、ますます怒りをエスカレートさせ、解決が困難になっていく。

早急な被害者への謝罪については、むしろ加害者ではなく、学校が未然に防げなかったというその重い責任を感じて速やかに行い、そこで加害者への指導の経緯を説明し、心からの謝罪の気持ちが生まれ次第行うことの了解を得たい。

いじめは、被害者の納得のいく解決がなされなければ、被害者は何かあれば、いつまでもそのことにこだわり、一方そのことを持ち出された加害者は、解決したはずだと“逆ギレ”状態になり、とてもやっかいな状況になっていく。

小学校でのいじめが中学校まで尾を引いて問題になっているのは、決まってこのパターンである。中学校の現場では、多くの教師がこのことを経験し、悩まされている。

また中には、「子ども同士」の問題なので、何も親が謝罪する必要はないと主張する親もいる。そんな時には保護者の説得は難しく、無理をして新たなトラブルを抱えることだけは避けたい。そこでは、親と学校や相手との板挟みになり切れない思いをするのは、当事者の子どもでもある。子育てには、「子どもは親には心配をかけるものである、しかし親は子どもに心配をかけてはいけない」という金言がある。どの場合でも同じである。

(5) 解決したと思った、その後の見届けこそが本当の解決につながる

子ども同士のトラブル、とりわけいじめはどんな小さいいじめだと思っても、解決(和解)後のアフターケアと最終的な解決の見届け、しかも複数の眼による見届けをしっかりと行い、更に継続的に関心を持ち続けることは欠かせない。

いじめは、教育的見地からは、教師が解決したと思ってからが、本当の解決に向けての指導が始まると思った方がよい。

加害者には、自分のこれまでを静かにみつめ、自分の力で自分を変えていこうとする期間が必要である。被害者には、人間不信を払拭し新たな人間関係をつくっていくための癒やしと準備の期間が必要である。その途中でトラブルが起こったのでは、また振り出しに戻ってしまう。これらが成就した時にはじめて解決と言えるのである。

例えば、加害者は自分ではいじめだとは思っていないことが、いじめと認定され指導を受けたという悔しさがある時には、教師の指導を受け入れず、その行為をよりエスカレートさせていくことは十分に考えられ、警戒を怠ることはできない。

双方への「その後どうだ」の声かけは、かなりの長期にわたって必要である。特に被害者はそのことで、先生はいつも見守ってくれているということで安心をする。

(6) いじめの再発は保護者も社会も決して許さない

いじめがあっても、学校の努力や被害者側の理解で、いじめの解決が見られたと判断され、双方が落ち着いた生活を送っていたにしても、再び同じ学校でいじめが発生したとなれば、被害者の保護者はそれを決して許すことはない。

それは、自分の子が再び被害者になれば言うに及ばず、誰が被害者になろうと、教訓が生かされない学校の体質、認識の甘さ、取り組みの安易さを許してくれないのである。

いじめの再発は、一回目とは全く違う認識でとらえられる。学校は一般の子ども、保護者そして世間からも絶対に許してもらえないと心得るべきである。

マスコミ報道でしか知る由はなかったが、最近あった福島からの避難児童に対する新潟市のいじめの事例も、その直近にあった「横浜市での同じようないじめの教訓が全く生かされていない」ということに対する社会の怒りが、全国ニュースのトップで扱われるまで問題が大きくなった最大の理由だと私は考えている。

危機管理とはそういうものである。一度いじめが発生した学校や学級には、よりいっそうの緊張感が必要なのである。

(7) いじめの傍観者は本当の加害者と同列にはとらえられない

学校では、「いじめを知らないのは教師ばかりであった」という事例は決して珍しいことではない。

昨今では傍観者という立場はほとんどなくなり、加害者と見るようにはなっているが、その時、何もせずに見て見ぬふりをしていた傍観者も加害者だという指導では、どうして子どもの納得は得られないであろう。

ひとたび学級でいじめが発生すれば、自分を守るためには、不本意ながら加害者の立場に身をおかなざるを得ない状況になっている子どもも大勢いるのである。

特に、女子のいじめに関しては、男子は傍観している場合が多い。その逆もある。子どもも集団の中では自分を守ることに精一杯で、どうすれば安全かを考えているのである。

「見て見ぬふりをする子」が単なる「傍観者」ではなく、一緒にはやしたてたり参加したりしている「同調者」であれば、加害者として徹底指導するのは当然だが、現実には、傍観者には心の痛みは感じてほしいが、彼らをいじめの「加害者」とするのは酷である。

それよりも、そのようないじめを許してしまっていた教師の注意力のなさ、そのようなレベルの低い集団しかできなかった集団づくりのリーダーである教師の責任こそが、傍観者の何倍も厳しく問われなければならない。

もしも責められるとすれば教師の方である。それを子どもの問題だとし、自分の心の痛みとして感じない教師は、いつまでたってもいじめのない集団づくりは不可能である。

4 いじめる子への指導をもっときめ細かに

(1) いじめる原因や背景を探り、まずそこに心を寄せていく

いじめがよくないことは、誰でも知識としては知っている。だからこそ教師が見えないようにやる。

しかしひとたびそれが発覚した時には、加害の子どもによっては大きな動揺をみせ、自分ではどうしてよいかわからない不安定な状況になりパニックになることもある。また、世間では到底認められないような理屈をならべ、開き直りに徹する加害者もいる。

いずれにしても、これから先自分の身に起こるであろう数々の変化に恐怖をいただいていることのリアクションと考えてよいのである。それには教師はつとめて冷静に対処したい。

そんな中、いじめがはっきりした時に教師は、彼のその行為だけを見て指導するのではなく、いじめの原因やその背景を全力で探り、いじめの全体構造をまず明らかにしたい。

そうでなければ、指導が的外れになり、効果的な指導はできない。行為を叱ることは誰でもできるが、それだけではいじめの解決、彼の変容にはつながらない。

教師が安易に正論を振りかざし、いくら威圧的に指導しても、彼の心に響かなければ意味がない。早く教師の説教が終わってほしいがために、彼は神妙に話を聞いたフリをするが、決して心は変わらない。教師の自己満足だけが残るのである。

いじめる子は、同調者であっても決まって現実に対する何らかの不平不満をかかえ、ストレスを募らせている。そのストレスや彼の行動特性がどこからきているのかを探り、まずそこに心を寄せ、保護者の協力を得ながら一緒に改善を図るよう努力することが教師の仕事である。

また普通は、いじめをしてしまった、それによって相手を深く傷つけてしまったという自責の念や後悔の気持ちを指導のどこかの段階でいつかもつはずである。教師はあせらず彼が自らの力で気付くまであきらめず指導を続け、それを正面から受け止め、しっかりと応えていかなければならない。その厳しい営みがなければ彼の心は変わることはない。

(2) 彼のストレスの元になっていることには保護者との同一認識で解消に向かいたい

上でも述べたが、通常、いじめる子は公德心の欠如もさることながら、日常何らかのストレスや不満を抱え、そのはけ口としていじめをしていると考えることが一般的である。

指導により目の前のいじめは止められても、その原因が解消されなければ再びいじめがくり返されるか、別の問題行動になって現れることがある。

そのストレスが学校にかかわることであつたり(学業、友だち、教師などが代表格)、家庭にかかわること(過干渉、愛情不足、家庭内の不仲が代表格)であつたりするが、いじめの行為は許せなくとも、彼の感じているストレスは理解していきたい。

そして、ストレスの原因についての保護者との共通認識は欠かせない。しかし万引きなどの単発的な問題行動と違って、いじめなどの問題行動が習慣化されてきている子どもに対する指導が難しいのは、学校と保護者の「子どもの現状認識に対する共通理解」である。

問題解決のためには、確かな事実や行動(目に見える問題行動)を共通理解するに止まらず、その背景や原因となっていることを共通認識しなければ、両者は解決の土俵には上れない。たいていは学校も保護者も自分の方には非がないと考えがちになるのが常である。

例えば授業中の「立ち歩き」は、その事実は双方で了解できるが、その原因となると、教師の“彼の我慢が足りない、他の子は席についている”と、保護者の“先生の授業が退屈、教頭先生の理科はちゃんと受けている”とで平行線をたどっている例が実際にあった。

とても困難な作業にはなるが、教師も保護者も他に責任転嫁することなく、応分の責任を自覚した時から問題の解決が始まっていく。

(3) いじめ指導のポイントは「謝罪」の仕方と子ども特有の心理の理解にある

加害者の、心からではない早期の謝罪や誰でも言えるような安易な決意表明は、問題解決に向けてはむしろ害になる。加害者には、「なぜいじめのような卑劣な行為を行ったのか」、「自分の中のどんな心がそうさせたのか」、「なぜ未然に防げなかったのか」、「いじめている最中は、被害者のことをどう考えていたのか」等を十分考えさせ、表面的ではない“本当の心の奥”をえぐり出させなければならない。ここが最も肝心な指導である。

自分が早く楽になりたい、問題を終わらせたいからではなく、行為を心から悔い、相手のためにどうしても謝りたい気持ちにさせる、それこそが教師の専門職として役割である。

そのためには、教師の我慢と粘り強さ、そしてある程度の時間はどうしても必要である。

ところで、いじめの指導にあたっては、人間のあるべき理想的な姿や基準を持ち出して指導するだけでなく、子ども特有の心理(人より目立ちたい、集団の一番下には絶対になりたくない、みんなの前で恥はかきたくない等)や、子どもの社会を支配している“オキテ”(チクルことは最悪の行為、ボスの指示や考えは絶対、集団内の暗黙の序列は乱せない、友だちのいないことは何よりの恥等)をわかった上で指導をしなければ、教師の言葉が心に響くことはない。

教師が、子どものその切ない気持ちやジレンマをわかった上で指導をしているのか、単なる建前で指導しているかは、子どもには必ず伝わっていく。

(4) 加害者には発達段階に応じた責任のとりせ方も重要である

大事なことは加害者には、「被害者に対して自分のやったことの責任を親ではなく本人にとらせること」である。

発達段階に応じて、自分のやった行為の結果については自分で責任をとることが“世の中のルール”であることを身に染みてわからせることが、いじめの再発防止のみならず、その子の成長に確実に繋がっていく。

いじめられた相手の苦しさに本当に気づかせ、心から謝り、その上でその謝罪の気持ちが「その後の彼の行動や考え方の変容」に確かにつながっている、自分にもその気持ちが伝わってくると、被害者が認知したときに、彼は少しは謝罪を受け入れようという気持ちになっていく。謝罪をした日が謝罪を受け入れるかどうかのスタートの日なのである。

いじめの被害者は、加害者の謝罪後の行動や言動を恐ろしいくらいにまで注視し、その結果如何で謝罪を受け入れるかどうかを判断する。加害者は、その後の謙虚な立ち居振る舞い全体でその責任を感じていることを表していかなければならないのである。

実際にあった例だが、ようやく謝罪をさせてもらった翌日に、加害者が教室で友だちと大声で話をし笑っていたという行動を、久しぶりに登校した被害者が目撃したことから、「彼は何も反省していない」と判断し、全く逆戻りし、「許さない」と態度を硬化させたのである。被害者の受けた心の傷を癒やすのは並大抵なことではない。

また被害者の要求には、それが理不尽ではなく社会的な常識の範囲であるならば、必ずそれに応えなければならない。それが謝罪の中身であることをしっかりとわからせたい。(心理的責任) 謝罪の言葉だけが謝罪なのではないのである。

そして子どもと言えども、いじめの内容にもしも犯罪的な行為があった場合には、学校のみならず関係機関による懲戒や損害賠償等の社会的な責任をとらせることもでてくることがある。保護者でなければできないこともあるが、子どもができることは極力本人にやらせることが大事である。(社会的責任)

(5) 加害者の再出発は排除ではなく、教師、学級集団ともどもの再スタートから

いじめの事実が発覚したときに、いじめた子をラベリングして制裁的に集団から排除した時には、どこにも行くところがない彼は、再び牙をむき相手に挑みかかる。そんな指導で彼が立ち直ったという話は聞いたことがない。それは教師を筆頭にする集団の一時的なうさ晴らしに過ぎない。

どんな子どもでも、学級の仲間の輪の中にいたいと思っている。むしろ、そのためのいびつな自己主張がいじめなのかもしれない。

彼らを集団から排除したところで何の解決にもならず、彼も集団もかえって悪い方に進んでしまう。担任としては、彼に自分を真摯に見つめさせ、自分のやるべきこと、できることは何かを明確にし、集団に少しでも貢献させながら、学級集団の一員として取り込んでいくことが、彼の立ち直りには何より必要なことである。

そして、集団全員がいじめを許してしまったことに「心の痛みと応分の責任」を感じ、教師も含め集団づくりを再スタートさせることで、彼も集団に溶け込み立ち直っていく。

教師の一番問題となる態度は、「よい子になったら学級の仲間に入れてやる、悪い子のうちは仲間に入れてない」という姿勢である。

ここで再確認しておくが、子どもがよい子になるまでが生徒指導であり、何より教師の指導や支援を必要とする。よい子になってしまえば、教師は見守るだけでよい。

(6) どうすべきかを自分で考え決定し責任をとる態度の形成を目指していく

加害者も個人により、彼を取り巻く状況が異なる。状況をよく把握し、彼に即したきめ細かな指導が必要である。

その際に共通して大事なことは、教師が単に指示・命令をするのではなく、自己や自己をとりまく状況を少しでも改善していくためにどうすればよいかを自分で考え、最終的に彼自身が判断、決定し、責任をとる、そして教師がそれを支援し続けることである。

いくらよいことだと言っても他からの命令や教師の指示によってやらされている(他律)うちは、行為の結果について彼は自分で責任をとることはせず、彼の成長はみられない。

その営みがなければ、彼の中にとっても大切な、自分の心に自分でブレーキをかける「自律の心」は育たず、同じいじめはほしくないにしても、また同じようなことをくり返していく。

(7) たとえどんな理由があろうと「いじめ」は許されないことを訴え続ける

みんなと違うことをする子、みんなに迷惑をかける子、自己中心的な子など、できれば一緒にいたくない子が集団から外され孤立していることがある。

教師は、たとえ仲間にしたくない原因がその子にあるにせよ、仲間外し、いじめという卑劣な手段でその子を追い詰めることは、人権上絶対に許されることではないことを、繰り返し訴え納得させていく。

そして、何とかして彼が仲間に入れる方法をみんなで考え、実行していくことが“人の道”であることを説き、教師が率先して実行していく。もちろん、当該の子にも人一倍の努力が必要であり、それを必ず教師が見守っていくことを理解させていく。

5 いじめられやすい子や将来のいじめ被害が想定される子の支援を入念に

(1) いじめられている子の悲惨な現実

① いじめが発覚した後の、更なるいじめのひどさを誰よりもわかっている

いじめの現実がひどくなればなるほどいじめは報告されなくなる傾向をもち、いじめられている子はじっと耐えながら、苦しい生活を強いられることになる。

いじめられている子は、そのことを先生や親に言えばさらにひどいいじめが待っていることは経験上十分に承知させられている。ある意味、それができない子とされているのでいじめのターゲットにされているという側面もある。

女の子同士のいじめで顕著なのは、「バレたらあんたのせいだよ」、「その時はもっとひどい目にあわせるからね」と念入りに発覚を防ぐための「脅し」をかける。いじめられる苦痛に加えて「いつバレるか」という不安と怯えまで抱えさせられる。そのために逆に自己の被害の隠蔽に走る。いじめの発覚を恐れる気持ちは、むしろ加害者よりも強い。

とても学校が楽しく休むしかない状況にあっても、いじめが発覚するかもしれないという不安から休めない。

そして、本人が休むことで教師がいじめを察知すれば、もっといじめがひどくなるという恐怖をもっている。自分のせいで発覚したと思われるようになることがとても怖いのである。まさに生き地獄のような悲惨な現実が学校を舞台にして実際に存在し、今も苦しんでいる子が助けを求めているのである。加害者の方は、いざとなったら「しらばっくれよう」と決めている。

② いじめられていることを一番言えないのが親である

どの子にとっても、いじめを親に言えないのは当然である。それには、「親の前ではいい子でいたい」、「心配をかけたくない」などいろいろな理由があると思われるが、一番強く働くのは、「親は自分のことに一番一生懸命になってくれる人、自分のことで一番怒る人、いじめがわかればきっと怒って学校に行ってしまう。そうしたら解決どころかもっとひどくいじめられる」と、まずは誰でもそう思うのである。

いじめの解決には、親の理解と協力はもちろん欠かせない。しかしながら、教師は本人のこの気持ちをわかった上で、早急かつ慎重に解決に向けてのスタートを切りたい。双方の親の一刻も早い協力なくしていじめの解決はあり得ない。

最近、いじめによる高一生徒の自殺者が出た、新潟市のある高校の学級担任は、報道によれば、本人からいじめの相談を受けたが、本人が嫌がるので保護者には連絡しなかった

とあった。ここでは、無責任な評論は慎むことにしたいが・・・。

いじめ自殺の報道に触れると、常に親の、悲しみにくれる悲痛な姿が映し出される。「どうして言ってくれなかったのか」、「どうして気付いてやれなかったのか」という後悔と自分を責める言葉が必ず報道される。いつでもマスコミは決まり事のようにそれを伝える。

しかし、上で述べたように、それができないのが「いじめの恐ろしさ」なのである。誰でもいい、周囲の大人が早く気付いてやり、周囲の大人や学校を挙げて彼を守りながら、加害者の指導にあたる必要がある。どんなことがあっても「命との引き替え」などはあってはならない。

③ ターゲットが変わるまで、苦しく悲しい日々が延々と続いていく

今日の学級における典型的ないじめは、たいていは「無視」から始まる。加害者は、まだいじめているという感覚はもっていないかもしれない。

それがだんだんとエスカレートし、友だちからは、まるで存在していないかのように振る舞われ、やがて、声をかけられるのは、「死ね」というメッセージだけになっていく。

それも「なぜ死なないの?」、「いつ死ぬの?」という恐ろしいとしか言いようのないメッセージを送り続けることもある。

人間は、一人でいる時に感ずる孤独よりも、誰かといる時に感ずる孤独の方がつらいと言われている。本人の苦しみは想像を絶する。

そして、次は何をされるのかと、いつもビクビクしながら生活をしている。無視はされているが、もしかして誰かが話しかけてくれるかもしれないことを、一日中待っている。しかし、誰も話しかけてもらえない悲しい日々が続いていく。

子どもにとっていじめは、嵐のようなものであると言われている。子どもは、嵐が過ぎ、ターゲットが他の子に移っていくのをひたすらじっと待つ。いつかは終わると思わなければ、とても耐えられない。

被害を最小限に、期間をできるだけ短くするために、従順な被害者でいる。それが最善策だと信じている。いじめへの恐怖はそれほど強いのである。

次のターゲットが決まれば、自分の安全は保証される。いじめの被害者はクラスに二人はいない、一人だからこそ効果があることを子どもたちは知っている。

そんな陰惨ないじめは、大人の誰かが早く気付いてやり完全に止めてやるしか解決方法はない。その一番の責めを負うべきは担任教師である。一刻を争う。本人に勇気をもてというのは、酷な話なのである。

④ いじめる側の巧妙な手練手管でいじめが継続していく

学級でいじめが継続しているにもかかわらず、一時的に被害者に優しくし、しかしすぐにいじめを再開することがある。

あたかもいじめが終わったような錯覚に陥らせ、再びどん底に突き落とす。決して珍しい例ではない。子どもたちは人がもっとも傷つく方法を知っている。

また時として、被害者と加害者のゆがんだ共犯関係の中で作られる独特の心理がある。被害者がある時から、暴力を振るわれることを許容しはじめると、時にそれを手加減してくれることに感謝の気持ちさえいやくようになる。また喝上げの金額を一時的に少なくすることも同じ効果を狙っている。

こんなことを繰り返しながら、いじめが延々と続いていくのである。これは、ツッパリグループによるいじめに典型的にみられる汚くない手口である。

⑤ とうとう耐えられなくなると、ようやくいじめを察知してもらえる行動にでる

被害者はいじめにどうしても耐えられなくなった時に、誰の目からもわかるようなメッセージ、例えば保健室から教室に入れない、学校を理由もなく休むなどを発信することで、ようやく教師や親がわかることになる。

彼にとっては、それはとても勇気のいる行動なのである。それでも直接的な言葉では表

せず、そういった行動でしか自分の気持ちを表せざるをえなくなった、子どもの切ない気持ちを、大人は必ずわかってやりたい。的外れな指導は決してしてはならない。

周囲の子どもはとっくに知っていたのであるが、誰も教師に知らせてくれず、耐えられなくなってはじめて彼は、イレギュラーな行動にでることになる。その時には事態はかなり深刻で、不登校になってしまうなど、解決が難しい状態になっている。不見識な言い方ではあるが、中には、不登校にさえなれなく苦しんでしまう子どももいる。

そうなった時には、その子の話に耳を傾けながら、「最後まで必ず守る」というメッセージをまず伝え、必ず全校で足並みをそろえ、その子の望む当面の問題解決に向かいたい。

(2) いじめられる原因がはっきりしているような子どもには

いじめの中には、ウソをついたり、グループを渡り歩き相手の悪口を言いふらすなど、そのいじめの原因が誰の目からもよくわかることがある。

近年では、「発達障がい」がその要因(特異な行動等)をつくっているのではないかと思われる子どもが目立って多くなってきている。彼の状況を周囲の子どもたちに理解させ、おおらかな対応をとらせることは大変に難しい。とりわけその行動特性が攻撃性を帯び、周囲が甚大な被害を受けているときには、ほぼいじめの対象になってしまう。

そのとき教師は、予想されたことが起きてしまったという後悔の念と未然に防げなかったという大きな責任を感じずはざである。

そこでその責任を十分に自覚した上で、たとえそうであっても、どんな事情があろうといじめという卑劣な行為は許されるものではないという態度を、内外に明確に示していく。

そして被害者本人に対しては、「だからいじめられるのだ」という自業自得を決して説いてはならない。その時には教師への不信感を募らせ、通る指導も通らなくなってしまおう。

そうではなく、いじめの解消を最優先にしつつ、本人の状況を見て「みんなと仲良くするために、自分も成長していくための努力をしよう」と励まし、具体的な行動への支援、とりわけスキルの習得を促していきたい。

(3) たとえ指導の難しいいじめであっても、それでもいじめは許されない

いじめの中でも、よくある集団の中で突出した個性をもっている子や勉強はできるが自己中心的な子、集団の足でまといになるような子を集団でいじめている場合には、加害者はいけないことをしている、正当化できないということは十分に承知している。

そのためいじめは教師に見えないように陰で巧妙に行われる。しかし、もしそれが発覚した場合には、いじめを止めさせる当面の指導は比較的スムーズに行うことができる。

ところで何度も繰り返すが、「相手はいじめているという感覚のない仲間外し」や「これまでやられたことの仕返しのためのいじめ」、「利害がぶつかっている者に対し自分を安全地帯におく匿名のいじめ」等、とても指導や解決が難しいいじめが多くなってきている。

仲間外しのような場合には「過去は仲間だったはずである、どんな事情があったにせよ、今は『1対多』という構図になってしまっている。その構図こそがいじめで、相手の苦しさは並大抵のものではない」、「被害者には不登校なども十分考えられる、その時にはどう責任をとっていくのか」、「行為を続けていけば、やがては必ず自分を責めることになり、大きな後悔にさいなまれるに違いない」と訴えていくしかない。

また、仕返しのいじめについては、同じようにいじめという卑劣な手段で仕返しをすることは、人権上許されないことであるとともに、自らの尊厳をも大きく傷つけ、自分の価値を大きく下げるものになり、やがて自分を責めることになることを理解させていく。

更に、匿名のいじめについては、被害者の気持ちに寄り添い、学校として、教育者としてできることを解決までやり続けていくしか方法はない。被害者やその保護者の要求に応じ、予断をもって加害者を特定し、彼から話を聞いた時には、二次災害は必定である。

その時は、たとえ特定の一人から話を聞きたい場合でも、全校生徒を対象に話を聞くくらいの慎重さが必要である。

稀に加害者が特定されることもあるが、その対応の厳しさは前半部で述べている。

(4) 仲間から外されやすい特徴をもった子には、全力で改善に向けての指導を

最近の中学校では、加害者がいじめているという感覚のない(しかし相手には大きなダメージを与えているという自覚はある)、仲間外しによるいじめが横行している。

加害者の反省が得にくいだけに解決が容易ではない。しかし、外された本人にとってこれほど切ないことはない。

ところで、この種の内じめは、事前の指導によって防ぐことも可能である。仲間を外される子は、できれば付き合いたくないタイプの子が多い。

どんなタイプがそうなのかは、過去のいじめの事例がよく教えてくれている。(下に中学校での具体例を示してみた)そのような特徴を持つ子は、できるだけ早い時期(小学校の段階までに)、具体的な場面を通して指導し、ぜひみんなと一緒にいたくなるような子どもにしてやりたい。

※ どんな特徴をもった子が仲間を外されやすいか

ダントツは小学校でボスとして君臨していた子(いじめられていた子たちが多数の力を得て立場が逆転する)、ウソをつく子、見栄をはる子、自慢話ばかりをする子、グループを渡り歩いて互いの悪口を言いふらす子、服装や持ち物が人と違って派手な子、常に自分が中心でないと満足しない子、すべての問題に親が出てくる親頼みの子、先生に必要以上に気に入られようとしている子、ウラオモテのある調子のよい子等

上のような行動特性をもつ子が、実際に仲間を外された時には、外した側がそれをいじめと認めることはほとんどないが、外された本人は保護者共々「いじめだ」と声高に訴えるため指導に困難をきたすことも多い。

何故困難かと言えば、教師の力では彼らをフォーマルな場面で普通に交流させることまではできるが、教師の指導をもって、本人が一番望んでいる“再び自分のお気に入りの仲間に入る”ことは、ほとんど不可能だからである。

(5) 真の解決には、友だち(心友)の「一緒にやろうよ」の一言が何より必要である

いじめが発覚した時には、教師の指導で加害者による当面のいじめが止まっても、被害者にとっての本当の解決にはほど遠い。

彼がどうしてもほしいと願っているのは、自分のことを心から心配してくれる仲間、一緒にいて安心できる仲間、「一緒にやろうよ」と言ってくれる仲間なのである。

どんな子にとっても、学級に自分のことをよくわかってくれる、一緒に喜んだり悲しんだりしてくれる“心の友”が、一人でもいいのでどうしても必要である。そうでなければ彼は常に息苦しさを感じていて、学級には居らず何かあればいじめを訴えることになる。その役割は教師が代わりをつとめることはできない。教師にはその理解が必要である。

その人数が多い少いは関係ない。いくらメールアドレスをたくさん登録していようが、ライン仲間が大勢いようが、「心友」のいない子の心が満たされることはない。

例えば、学級で人間関係のトラブルがあった時でも、「心友」のいる子は、彼に相談したり、場合によっては一緒に戦ってくれ、やがてそれは「トラブル」で終わっていく。

しかし「心友」のいない孤独な子は、そのトラブルはたちどころに「いじめ」となり、彼を追い詰めることになっていく。私はこれまでの経験から、いじめや不登校の問題は「心友」の有無が鍵を握るのではないかと考えている。

教師はその視点から一人一人を再度よく観察し、学級の誰もがそんな仲間がもてるよう対策を考え、みんながそうなるまで支援をし続けていくことが大切である。

このことは、学級の間人間関係づくりのもう一つの大きな柱にしたい。もちろん、必要な時には学級の誰とでも力を合わせて学習や活動が行えることが学級における人間関係づくりが大きな柱であるが、この「心友」のことについての配慮も忘れないで行っていきたい。

また、それにはリーダーの力も必要になってくる。メンバーのことに親身になってくれる支援的なリーダーをたくさん育てていきたい。

6 いじめに対し教師はどんな心構えで、実践上どんな点に力を注げばよいのか

(1) 月並みだが、子どもから信頼される教師となるよう努力を

① 教師はいつでも弱い子の一番の味方、側にいるだけで子どもが安心できる教師に

学級には、学習や運動、あるいは仲間づくりの面においても、その時々弱い立場におかれる子ども、不得手な子どもが必ず出てくる。

そんな時には、まず何をおいても教師が一番の味方、サポーターになりたい。その態度は、どんな場合でも絶対にブレてはならず、学級運営の基軸とするのである。

発奮を促すためだといって集団の中で子どもに恥をかかせるような指導や、子どもに迎合するあまり、人権感覚が疑われるような言動は決して認められない。それは絶対にあってはならない「教師によるいじめ」である。

小・中学生のような発達途上の子どもが何かに挑戦して失敗し、その上教師に追い打ちをかけられることで、「もう二度とやるもんか」、「もうだめだ」と思うようでは、それはもはや教育とは言わない。せっかく勇気を出してチャレンジした子どもが“恥をかいたまま終わる”ようなことは絶対にあってはならない。

教師は温かさの中で本人を発奮させなければならない。教師のそうした温かさは、やがて学級全体へも浸透し、一人一人の子どもに何とも言えない安心感（もしも自分がその立場に立った時にも、先生が必ず助けてくれるという確信）と公平感を生み、それは学級づくり、とりわけいじめのない学級づくりの最大のポイントとなる。

また、困っている子には、これみよがしに助けてやるのではなく、その子のプライドを大事にしながらの「さりげない援助」が大切である。

教師はいつでも公平・公正で、困った時には、どんな時でも助けてくれるという姿勢で常に子どもに接していきたい。子どもの言うことには真剣に耳を傾け、子どものためには、おっくうがらず、明るく動いてくれる教師でありたい。必ず子どもの信頼を得ていく。

② いじめを生まないためにも、徹底して一人一人との平等な人間関係の構築を

子どもは、「よい時も悪い時」も「よい面も悪い面」も教師には、丸ごと受け入れてもらっていると感ずることが何よりの安定感につながる。

とりわけ自分の長所、得意なことは必ず教師にわかってもらいたいと願っている。それが生徒理解の基本である。

子どもは努力している姿、成功したことは教師に一番見てもらいたいと思っている。誇らしいのである。ある意味では、自分が困っている時以上に、見てもらいたいために教師を必要としている。自分は教師に愛されているという安心感があってはじめて、友だちへも関心を向けることができ、友だちのことも考えられるようになる。

もしも教師の愛情に不公平を感じているとしたら、子ども同士が仲良くなることはあり得ない。女子のグループ化も教師に愛されていないと感ずる子ども達が、まずその負の共通点で団結を強めることからグループができていく。同じ不平不満をもっている者同士ほど、グループの結成速度は速くなり結束力も強くなる。

このようなグループに属する生徒は、教師の指導にことごとく背を向けたり、常に後ろ向きの発言や行動をとることになり、学級集団づくりには大きなネックになっていく。

上のように、子ども同士の人間関係づくりも、教師と子どもとの人間関係が大きく影響していることを認識しなければならない。子ども同士の関係づくりは、教師と子どものあくまでも平等で愛あふれる人間関係が前提なのである。

いじめは、先生のお気に入りの子どもが、そうでない子どもたちの妬みを買って、集団で足を引っ張られることから起きていることも珍しくない。

ちなみに、子どもが最も嫌う「エコヒイキ」は、小学校では、教師のその子に対する「お気に入り度」の差である。先生に嫌われていると認知している子どもの学校生活は悲惨な

ものとなる。

中学生くらいになると、その契機が少し変化し、自分は教師に期待をかけられているかどうかの、「期待の差」を認知する。そこに差を感じた時には、教師が何をやっても子どもとの人間関係はできない。

③ 教師が「弱い子を中心とする学級運営」のスタンダードをつくっていく

学級の運営で大事なことは、その時々に見られる「弱い立場の子」、「不得意な子」、「できない子」を中心に据えて学習や活動を推進することを学級のスタンダードにすることである。いじめを生まない学級づくりの“鉄則”である。

勉強のできる子だけが中心となって進む授業や得意な子が活動を仕切った時には、必ず無理や反動がでる。集団のリーダーができる子や力のある子の方にだけ向いていたのでは、できない子や弱い子はいたたまれなく、自分を守ることに精一杯で集団に所属していることが苦痛になっていく。

もしも教師がそのことに無関心でいたならば、強者の論理による価値観が学級を支配することになり、弱い子の居場所がなくなり、孤立したり、いじめの対象になったりして、学級はどんどん悪い方向へ進んでいく。

しかしそうではなく、教師が何事をするにも、常にその時々を考えられる学級の中で一番弱い子に対する配慮があるばかりか、むしろ時には彼が主役となるような活動を組織していくことで、子どもたちからの信頼と尊敬が日増しに大きくなっていく。

そんな信頼できる教師には、子どもは、いじめの相談も深刻になる前に必ずしてくれるはずである。

そしてそんな教師をモデルにし、その姿勢や価値観がだんだんと子どもたちの中に浸透し、そういう行動をとれる子どもが次第に増え、それが確かな学級風土となっていく。

④ 教師は集団に最も大きな影響を与えるリーダーであるとの自覚が必要

上の③とも関連するが、その学級では、「どんな行為や考え方が正しいこととして実践されるか」は、いじめの発生を大きく左右する。

教師は学級の規範づくり・風土づくりに一番影響を与えるリーダーとして、公正な集団づくりに“君臨”したい。

子どもたちが、教師以上に学級で気を遣い顔色をうかがわなければならない“ボス”の存在は決して許してはならない。教師の民主的な態度に基づく公平公正な考え方や行動が、つねに子どものモデルとなり、学級のスタンダードとして機能していることが望ましい。

そのためには、「教師の言動や立ち居振る舞いこそが、最高のお手本であることの自覚」「大事なことは学級の風土になるまで言い続ける」、「大切なことは習慣になるまで見届ける」、「正しいことや、正しい行いをする者がみんなに支持をされること」などは、とりわけ重要である。このような学級では、いじめのような卑怯な行為はみられなくなっていく。

⑤ 教育は、学びの結果とそのプロセスの双方に価値があることの認識を

「自主協同学習」は、子どもに「何を教えたか、何が身に付いたか」という教育の結果と同じくらい、「どのようにしてそれを教えたか、どのように学習して身に付けたか」という教育のプロセスを重視し、むしろそれが教育にとっては大事なことだと考えている。

なぜならば、子どもは指導された結果(知識や技能)とともにそのプロセスからも同時に学習し、それを身に付けていくからである。

「何を学ぶかと共にどのように学ぶかにも教育的な価値をおき、大事にする」というアクティブ・ラーニングとも、その理念は全く軌を一にする。(但しアクティブ・ラーニングはその学習プロセスを通じた人間関係づくりや集団形成まではそれほど意を用いない)

ところで、授業においては、子どもに影響を及ぼすものとして二つのカリキュラムが存在し、それが同時進行しているということを教師は認識しなければならない。

子どもは純粋に知識のみを学習することはあり得ない。それは授業に即して言うならば、

「知的なねらい」を達成するためのプロセス、いわば目に見えるような状況で進行している指導過程が“顕在化カリキュラム”である。

一方“隠れたカリキュラム”は、その新しい知識なり考え方が、どのような方法で、どのような人間関係や集団規範のもとで獲得されていったかに代表されるものである。

よく大人が学校時代の先生から何を習ったかはすっかり忘れても、どんなやり方で教えてもらったか、どんな雰囲気の中で学んだかをしっかり覚えているという類のことである。

この隠れたカリキュラムは、学習集団の人間関係や個の人格形成にも大きな影響を及ぼす。授業でのこの過程を民主的で望ましいものにしていくことは教師の重大な責任である。

これが教師による高圧的な態度であったり、成績で人間の価値が計られたり、仲間同士が競争させられたりしているようでは、それが子ども同士の間関係の不調に直結し、時にはいじめに発展することは容易に想像できる。

この両面の要素が望ましく満足できるような授業こそが、現在一番求められている授業であり、今日の社会的な要請、教育課題に応える道ではないかと、私は確信している。

⑥ 教師の「笑顔と待つ心」はことのほか子どもを伸び伸び安心させる

教師の笑顔と子どもを待つ心は、子どもを受け入れていることの最大のメッセージであり、温かさの証明である。これらは、ことのほか子どもの気持ちを伸び伸びさせる。

そして物事に積極的に取り組ませる支えとなる。また教師自身も笑顔でいれば気持ちにゆとりが出るために、子どもの欠点よりも長所が見えやすくなる。

笑顔と子どもを待つゆとりがあることで、見えないものが見え、聞こえないものも聞こえるようになる。

反対に教師にゆとりがなく、常にイライラしていれば子どものよさは見えず、子どもの欠点ばかりを指摘するようになる。

そうなれば、注意ばかりされている子どもはどんどんストレスがたまり、結果としてそのはけ口を、学級の中の弱い子や先生のお気に入りの子に向けていくことは十分に考えられる。笑顔がなく子どもを待てない、そんな教師のゆとりのない構えが、いじめを生む原因になりかねないのである。

⑦ 教師は品性あふれる立ち居振る舞いで、生き方の1つのモデルに

教師は、子どもにとっての、望ましい考え方や行動、品性あふれる立ち居振る舞いのモデルとしての役割も果たしたい。それは、生徒指導においては有力な教育方法となる。

“子どもを教師の言う通りにさせることは難しいが、する通りにさせることは比較的容易である”という言葉もあるくらいである。

子どもにとって生き方のモデルは決して1つである必要はないが、親以外の一番身近な大人として、子どもに恥じない生き方をしていきたいものである。

それには、ことさら聖人君子である必要はないが、“子どもに説明できないことは決してしない”という心構えだけは持ち続けなければならない。そしてやがては、“先生のような人”になりたいと言ってもらえれば教師としては本望である。

(2) 実践をすすめる上では、教師はどんなことに力を入れればよいか

① 教師の“気になる”という感覚こそ大事にしたい

生徒の指導だけではないが、教師の「気になる」という感覚は重要である。

例えば、自分の教室の机が乱雑になっていることが、気になるか気にならないか、廊下や教室のゴミが気になるかならないか、全校朝会で下を向いている生徒が気になるかならないか、休んだ生徒のことが気になるかならないか、いつも一緒にいる生徒同士がいないことが気になるかならないか、挨拶の音がふだんより小さいことが気になるかならないかなど、挙げればきりが無い。

そこで気になれば、必ず声をかけたり何らかの手を打ったり行動をとることになる。初

歩的ではあるが、現実的な危機管理である。いじめの端緒はそこで発見されることが多い。ただし、その根底に教師の温かさや思いやりがなければ、それは指導ではなく、ただ自分の気分がそれで不快か不安定になっているだけであり、教育的な意味はない。改めて言うまでもないが、“気になる”のは、ふだんと違うから気になるのであって、とりわけ子どもの様子などは、常に関心をもって見守っているからこそ、気になる様子が見えてくるのである。これは生徒指導の大事な基本でもあると考えている。

② 一人一人のよさや得意が発揮できる出番を用意し、全員を目立たせたい

とかく教師は「勉強や運動のよくできる子」、「リーダー性のある子」、「教師の言うことをよくきく子」だけに高い評価を与えがちになる。

学級にはそれでは浮かばれない子どもは大勢いる。そんな彼らがただ黙っている訳がない、何らかの方法で自己主張をすることになる。

教師への反抗や、場合によってはいじめによって憂さ晴らしをしないと限らない。教師は、限られた物差しではなく、できるたくさんの評価の物差しをもって子どもの長所を見つけたい。それが温かい先生と言われ、どの子も教師に大事にされているという実感をもつ。ちなみに冷たい先生は、限られた物差し(成績等)でしか子どもを見ない先生である。

ところで、教師によっては、「あの子は目立たない子」などと、自分が教育者として「彼を目立たせられない責任」を全く感ずることなく、目立たないことを一種の個性やキャラクターにしてしまっていることがある。

ひどい教師は、あの子は“いじめられやすい子”などというレッテルを貼ったりすることもある。非常識きわまりない。世の中に、「自分は目立たなくていい」、「自分はいじめられやすい」と思い、それで満足している子がいるのだろうか。

もしもその方が集団に居心地がよいと考えている子どもがいたら、教師を含めた周りが、彼を「自己防衛」のためにそうさせてしまったのである。

教師の仕事は、まさに子ども一人一人を「目立たせること」であり、“いじめられやすさ”を完全に払拭することである。それが子どもを育てることである。

子どもは目立って、みんなの注目を浴び、賞賛を受けることは大変うれしい、これからの生きる大きなエネルギーになっていく。教師は、工夫次第でどの子にも光を与えることはできるはずである。それでこそ報酬をもらえるプロなのである。その教師の姿勢は、子どもにも必ず伝わり、みんながみんなを盛り立て、生き生きする学級ができていく。

そして子どもにとって、この学級ならば“自分にもいつかは必ず出番がある”という確信をもつことが、何よりの安心、やりがいにつながっていく。

ちなみに、目立たせる一番の方法は、どんなことでもよいが、一度はその子に学級集団を動かすリーダーシップをとらせることである。

③ 子どもが送るサインを読み、彼の背景に心を寄せる

子どもの何気ない一言や表情に、あるいはそのしぐさに心の悩みのサインがある。また、もしもいじめを受けている場合には、敢えて目立つサインを送ってくる子どももいる。

しかし教師がそのサインを見落としたり、読めなければ状況は何も変わらない。サインは教師が読んでやっってはじめて意味をもつ。

ところで、冗談めかして言った言葉の裏に真実があることもある。目に見える子どものトラブルは氷山の一角であり、その問題を探っていったらとてつもなく大きな問題にぶつかった。あるいは、その事実の裏にこそ本当に解決を待っている問題があったという事例はいくらでもあり、むしろその方が多いと考えていきたい。

子どもの話の背景や何故そんなことを言うのかを読み解くなど、落ち着いた慎重な対応と心配なことに対しては複数の教師の合議による適切な判断が求められる。

先日の新潟日報(29.1.20)に、「下越地方の中学校で福島からの1年生の生徒が、12月に“菌”と呼ばれていじめを受けていると保護者に話し発覚した。それ以前の1学期に作文に書いてそのことを明かしたが、教師がそれを最後まで読まず採点をして返したため把握

できなかった」という内容の報道があった。

私たちは、記事からしか判断できないが、作文に書くことは、サインというような曖昧なレベルではなく、直接言葉、それも書いた文字で教師に訴えている。子どもにとって、これ以上のものはなく、教師からは何の反応もなかったその時の生徒の気持ちは、どう想像してよいかわからないくらいである。

さらに、長年教職ついていた者の常識では、どんな作文であろうと最後まで読まないで採点して返すなどという対応は考えられないということだけは言っておきたい。

この事例から学ぶことはたくさんあるはずである、プライバシーに配慮しつつも、ぜひ全容を明らかにしてもらいたいものである。(書いた作文が載っていた 19.1.24 新潟日報)

④ フォーマルな場での子ども同士の交流(協同活動)の活性化が仲間づくりの王道

学級の間関係は何の手も入らなければ、単なる好き嫌いで結ばれた人間関係(「遊びの間関係」)に支配され、その結束が強くなればなるほど他とは敵対し、それがエスカレートすればいじめに発展することがある。もちろんその関係は授業ではマイナスに働く。

しかし教師は、いじめにつながるような明らかな行動や仲間外し、不適切な言動はもちろん厳しく指導しなければならないが、ふだんの私的な仲間づくりや子どもの遊びの世界にまで介入することはできない。

「〇〇さんを仲間に入れてやってほしい」というような懇願的な指導は、決してうまくいかなく、まじめな子どもたちにほど過度な負担を強いることになる。

学級の仲間づくりのためには、あくまでも授業での学び合いなどフォーマルな場面での交流を活性化させることを主たる方法にしたい。

そこでは、たとえ普段対立している者同士でも、私的な感情を抑えて課題の解決に向けてのコミュニケーションを行い、力を合わせられる場面を多くつくっていききたい。そのプロセスを通して、互いに自然と打ち解け、相互理解も進んでいく。

そこではとりわけ、「みんなと力を合わせて課題が解決できた」、「友だちに助けてもらった」、「自分のよさを認めてもらった」、「みんなの役に立った」などという実感が、学力づくりとともに人間関係づくりに大きく寄与し、友だち同士の関係はいじめとは対極の方向に進んでいくはずである。

⑤ 友だち同士が明るいあいさつを交わし合っている学級・学校を目指す

「おはよう」という元気なあいさつは、友だちと仲良くなるための第一歩である。常に明るいあいさつの響き合う学級は、人間関係もよく居心地がよい。

いじめのある学級では、あいさつが行き交うことはない。明るいあいさつを子どもたち全員で交わし合っているかが、学級の間関係、いじめ有無の有力なバロメータとなる。

昨今どこの学校でもあいさつ運動などを行い、あいさつ指導には力を入れている。しかしそこでは、とかく教師や地域の方へのあいさつに目が向きがちになるが、重要なのは、学級のメンバー同士のあいさつである。

子どもたちは嫌いな者や対立関係にある者とは決してあいさつをしないし、目も合わせない。その様子は、見ていれば誰でもわかるくらいはっきりしている。

「誰とでも分け隔てなくあいさつを交わし合っている学級」の間関係は必ず良好である。誰とでも明るいあいさつを交わすことを実践目標にし、子どもたちと共有することでも、いじめのない学級に確実に進んでいく。

⑥ 人間関係づくりは強制できない、しかし誰とでも力を合わせられるまでに

人間である以上、相手に対しては好き嫌いの感情があり、気のおけない仲間や話の合う人がいたり、一方で気を遣う人や苦手な人がいる等さまざまである。この感情は、大人だけでなく、子どもであろうと、そのことを否定することはできない。

お昼休みをなどの自由な時間の子どもたちの過ごし方を見ていればその実態はよくわかる。それは“生きたソシオグラム”とでも言える様相を呈する。

したがって学級の「誰とでも仲良く」は理想ではあるが、元々はライバル同士であるだけに、実際には至難の業である。教師がそれを強制しても子どもは反発するだけである。

しかし、授業や学校での活動に際し、子どもが相手への好き嫌いの感情の赴くまま(『遊びの人間関係』)に行動したのでは教育活動は成立しない。

学校では、一人一人がもつそのような感情を理性の働きで「心の奥」におき、必要があれば、誰とでも力を合わせられる『学びの人間関係』をつくっていくことこそが人間関係づくりの目標である。もちろんそれは「いくら本を読んでも自転車には乗れない」と言われる如く、主として授業における学び合いなどの「経験」を通して育っていくものである。

その継続の先には、必ず良好な人間関係の構築が待っている。

また、必要によっては、誰とでも力を合わせられる態度は、将来の社会生活においても極めて大事な能力となり、人間関係づくりの“要諦”と言ってもよいのである。

ところで、学級で孤立していたり、いじめを受けている子どもにとっては、学校での自由な時間ほど苦痛な時間はない。ある意味では恐怖を感じずる時間である。小集団学習場面でも同様である。彼らは一斉指導であれば友だちとの関わりがないので安心して授業を受けられるが、小集団学習は何が起きるか分からない不安で嫌な時間となっている。

それは特に自分が孤立していることを際立たせたり、実際のいじめが行われるのがこの時間帯だからである。昨今の学校では、昼休みは教師が一番緊張する時間帯になっている。

⑦ 順位をつけて終わるのではなく、常に「みんながゴールすることをみんなの目標に」

授業や活動における競争はすべて否定されるものではない。競争かどうかは、その形態ではなく目的で判断しなければならない。

教育の場面で競争かどうかは、集団内で順位をつけることを目的としているのか、一人残らずゴールする過程でそのよさを活用するために行われているかで判断するのである。

したがって、互いに高め合うことを目的として行われる「切磋琢磨」は協同の高度な姿として、むしろ奨励されなければならない。

競争は一番の者がゴールしたらレースはそこで終わり、一番の者や勝者は圧倒的な満足感を味わう(それが学習への動機付けになっている)が、敗者は打ちひしがれる。

授業でひんぱんに競争による動機づけを用いている教師が注視しておかなければならない学級の人間関係の分岐点がある。

それは、学級で、間違っただけをバカにする、友だちの成功と一緒に喜ばずむしろ妬む、他人が失敗すればいいと思うようになる、課題解決よりも他人に勝つことが目的になってしまう、自分のライバルの足を引っ張る、こんな子どもが出始めた時である。これらはすべて競争のリスクと考えてよいのである。

その時には、学級での競争はすぐに止めなければならない。そうってしまった子どもたちの価値観を変えるのは大変である。そのまま進めばいじめにも発展する。

競争によってモチベーションが高まるのは、勝つ見込みのあるごく一部の者だけである。勝つ見込みのない者は、はじめから競争のスタートラインには立たない。それが傷つかずに済む最良の方法だと心得ている。

このことは、勝ち負けの問題だけではなく、彼らは大事な学習をもボイコットすることになることから、授業や学力づくりにおいては重大問題となる。

また授業での競争は、人間関係の視点からは、勝ち組と負け組の人間関係の分裂が決定的となり、勝ち組の中でも密かな嫉みが起き、いつ足を引っ張られるかわからない状況になる。負け組の中でも、最下位にだけはなりたくないという心理が強く働き人間関係を阻害し、そこからいじめを生む大きな要因が生まれてくる。

クラスにおける集団いじめは、もしかすると次には自分がターゲットになると認知している子どもが一番激しく彼へのいじめを行うという事実がそのことを如実に現している。

授業で、序列をつけるための無用な競争が行われている学級では、他にいくら人間関係づくりに関するトレーニングを行おうと、特活をいくらがんばろうと、教師の本音が透けて見えるだけに良好な人間関係づくりは決してできない。

⑧ 「みんながゴールする学級づくり」の実現は「学び合い」の充実から

序列をつけることではなく、みんながゴールする学級づくりの実践は、「学び合い」それも、ペアのような小さな集団から始めてみたい。ペアでの学習にはいろいろな形態があり、答え合わせや教え合いのようなものが一般的に行われている。

競争的な風土の中でのペア学習では、できる子の方が先に自分の考えを述べて自尊心を満足させ、できない子は聞くだけになってしまうが、協同的な中では、できない子の考えを先にいねいに聞くことから学習が始まる。

そして、両者が並んでゴールすることを目指すのである。そのプロセスこそが、「教え合い」、「教える者は二度学ぶ」ということの体現となる。

それは学力の向上ばかりか人間関係づくりにも大きく貢献する。

また、そこでの切磋琢磨も大事であり、切磋琢磨は相手(全メンバー)がゴールするまでレースは終わらない。手段として競い合う時もあるが、相手に勝つことが目的ではなく、学習内容を自分が理解すると共に、相手も同じように理解したりゴールに到達することを最終目的にする。

そこでの相手とのコミュニケーションには、課題解決に向けての情報のやり取りに合わせ、そこに「君も同じようにわかってほしい、一緒にできるようになろう」という思いや願いを常に載せていくのである。

このことは、簡単なようではなかなか難しい。場合によってはそれとは逆の感情(相手を見下すような)を伝えることになるかもしれない。みんなが同じ気持ちで実践することで、きっと学級におけるコミュニケーションのやり方が大きく変わるはずである。

つまりそれを、学級におけるあらゆる学習や活動における基本の態度とすることで、みんながゴールすることをみんなの目標にできるのである。

メンバーが一人残らずゴールに到達し、自信をもてるようになるまで、みんなで支援し、仲間全員が高まることを目指していくことが、もっとも大事な集団の育成ポイントである。

クラス全員がそのような意識をもち、それが集団規範として定着していくならば、いじめなどは起きない素晴らしい学級になっていく。

⑨ いつでも「貢献」、「感謝」、「期待」をキーワードに活動をすすめる

いじめのない学級を遙かに超え、一人一人が存在感をもち、輝く集団をつくりたい。それには、一人一人が学級にはなくてはならない存在になることである。

そのためには、集団の目的達成に向け、全員が役割をもって貢献する組織・システムをつくる必要がある。

そしてその取組(学習や活動)の過程では、互いの違いや個性を尊重することは欠かせない。それができない時には、それがいじめを生む土壌となっていく。

子どもは集団に貢献し、仲間から「感謝」され、更なる「期待」を受けることで大きく成長し、仲間づくりも一気に進む。

自分のよさを発揮しながら「学級の役に立てる」、先生や友だちは「自分に感謝し期待をしてくれている」、こんな気持ちを感じることができていけば、一人一人は学級に確固たる居場所ができていく。

とりわけ、友だちからの期待は教師のそれよりも、「自分もやれる、やってみよう」という活動意欲を一層高めてくれる。

そしてそれに合わせ、何事もみんなで力を合わせて成功させ、喜びを共にすることで“この学級が大好きである”、“私の学級は私の自慢である”といった意識が高まり、いじめのない素晴らしい学級になっていく。いじめのある学級を誰も大好きとは決して言わない。

学校生活の場面でその育成をどう図るかは、そう難しく考える必要はなく、フォーマル、インフォーマルを問わず、みんなが集団目標の達成や仲間や集団のために役に立つことで感謝され、仲間から「ありがとう」と言われることである。

学校中で「ありがとう」という言葉が行き交うことを目標とすることで、学校は確実に変わっていく。

7 いじめをしないために個人や学級はどんな力をつけていけばよいか

(1) いじめをしないために、一人一人にはどんな力をつけていけばよいか

①「自己抑止力(自律の心)」の形成

人間が生きていくには、自分の中にあるよくない考えや行為を押さえる力を自分の中に育てていくことが必要になる。一般的に言うならば、“自律の心”である。

それがなければ、ブレーキのない車ようになっていく。自動車業界では、“優れたエンジンには優れたブレーキが積まれている”ことは常識になっている。いかに優れたブレーキを心に積むかである。

それには、古くから心理学では、心の中に“恐い者”をつくることだと言われている。幼児期は、本当に恐い者だがやがて長ずるにしたがい、その中身が、自分を愛し信頼してくれているが故に“裏切れない者”へと変わっていく。

会津藩の「什の掟」にある、“ならぬことはならぬものです”という戒めは正にそのことを的確に言い当てている。

幼少期は他律的なしつけのもとで正義と公正な心を養っていくが、成長するにしたがって、悪を閉じ込め正しい行いを実践する習慣を、他からの強制や罰則ではなく、自分の心の中に植え付けていくのである。(それが本来の“ならぬことはならぬものです”という言葉の意味であり、大人が子どもに、理屈抜きで“ダメなものはダメ”と強制するために便利に遣う言葉ではない)

やってはならないことは、自分の心の命令に従ってやらない力をつけるのである。限りなく自律に向かうこの価値を自分の中に形成するプロセスこそが成長へのプロセスであり、いじめをしないためにはどうしても形成しなければならない力である。

思春期を迎えている子どもたちに対し、「こうなさい」、「それはいけません」などという上からの命令に無理矢理従わせる、乱暴で理不尽な他律は、そのリアクションとして確実にいじめを助長する。

② 「情緒的共感性」、とりわけ“心が痛む”という心情の育成

共感には、「知的共感」と「情緒的共感」があると言われている。人間は生活の中で、相手に知的な共感をいなく、相手の意見に納得するなどという場面は多くあり、またその気持ちは素直に出しやすい。しかし情緒的な共感となると、それぞれの個性や性格も大きく左右することから、素直に表すことがなかなか難しくなっていく。

いじめをしない、またいじめられている者を助けるためには、相手の“心の痛み”に共感できる感性をもつことが極めて大切であると考えている。

生徒指導では、子どもに育てたい資質として、「相手を思いやる心」を挙げる学校や教師がとても多い。またどこの学校でも、道徳の時間の主題の一番手は「思いやり」である。それは子ども達の実態からして十分に理解できる。

しかし私は、「思いやりの心」だけではいじめを防いだり、いじめられている子に手を差し伸べることはできないと考えている。

なぜならば「思いやり」は、時には自分の都合(その相手や状況を自分の意思で選ぶことができる)であり、時には“上から目線(思いやりをかけるという言葉に表れている)”となることもあり、特にいじめられている子を救ってやる動機としては弱いものとなる。

いじめをしない、いじめられている子を実際に助け出す行動の基となるのは、相手の心の痛みに関心し、そのことで“自分の心が痛む”という心情である。

相手への「思いやり」を超え、それを見た時には自分の心が痛み、助けないではいけない心情をみんながもつことこそ、いじめ撲滅にはなくてはならない。

それらの共感性や感性が育っていくことで、自分ではいじめをしないことはもちろん、弱い者を助けないではいけない大きな力になる。

いじめを平気でやっている子は、このような共感性や感性が全く欠如している。これらは、環境によって自然と育っていく部分もあるが、意図的な教育(経験の組織化)によっても育っていくことは間違いない。いや、教育によってしか育たない側面があることも理解したい。教師がそのことを意識しているかどうかが問題である。

そして、いじめに対しては、大きな嫌悪感を抱くという感性もまた同時に必要である。

いじめられている人間は、「顔で笑って心で泣いて」という心情でいることが多い。それを理解できるデリカシーをもっていることは、教師にはとりわけ重要である。

また、「感性や感情」も「知性」と同じくらい、あるいはそれ以上に発達の個人差がある。それを認めた上で、一人一人の子どもに対したい。

③ 自分から挨拶したり仲間に入るなど、「自発的な行動力」の育成

自分から挨拶できる子、自分の方から話題を提供し話を始める子、遊びの輪の中に自然と入っていける子、これらの子どもは、明るく誰とでも友だちになり、人間関係づくりの上手な子である。

同じ挨拶でも自分の方からする子と受けてから返す子、コミュニケーションでも自分から始める子と受けてから返す子とでは、一見それほどの違いは見えないようであるが、私は大げさに言うならば“天と地”ほどの差があると考えている。

たいていの教師は、それを“個性”と捉え現状で満足している実態も多いが、目指すべきは、必要によってはいつでも自分から自発的に行動を起こすことができるという態度の育成である。その態度は素質的な要素もあろうが、教育によって十分に育っていくことは優れた実践が証明している。

このような態度を身に付けた子どもは、いじめの加害者はもちろん被害者にもなりにくい。キーワードは、“自分から”である。ぜひ、どの子に対しても、何事も“自分から”自発的にできるよう心して指導にあたりたい。

ところで、その気持ちがあってもスキルが身につけていないために、何事も躊躇してしまい、望ましい対人関係を築けない子どもも多い。そんな子どもには、スキル・トレーニングも効果がある。

しかし、それは特設ではなく、できれば実際の授業や活動に溶け込ませて行いたい。また教師がそのスキルを十分身に付けておき、よきモデルになることも大事である。そして丁寧に根気強く教えていきたい。

④ 相手を気遣う自分の思いを、的確な言葉にして伝える力の育成

相手との望ましい人間関係を築く上でのキーワードは、「コンプリメント」である。ぜひ、トレーニングを積んで磨きをかけてもらいたいスキルである。

「コンプリメント」とは、褒める、ねぎらう、承認する、敬意を払うということである。従前から、相談者にねぎらいと励ましの言葉をかけるカウンセリングの技法として広く周知されてきている。そのことで相手の心がほぐれ、相談のためのラポートができていく。

一般に人間関係は、自分のよさを心から認めてくれたり自分が誇りとするところを褒めてくれる相手と結ばれる。いくらコミュニケーションが活発に行われていても自分のよさががんばりを本心から認めてくれない相手とは人間関係はできない。子どもであれば、それは友だちでも教師でも全く同じことが言える。

しかしながら、ふだんの生活において、相手とのコミュニケーションで相手を認めたり褒めたりすることは簡単そうで難しく、意外とやられていない。大人でもこのような現状があり、まして子どもたちの学校生活の中では難しく、むしろ相手の欠点や嫌がることを無遠慮にズケズケと言うコミュニケーションが横行している。

そのような人間は「自分の思ったことは相手かまわず何でも言ってよい、自分に正直であるべきである」という誤った価値観をもっているか、精神的に幼く、自己中心性を脱却できないでいると考えなければならない。

それでは、健全な集団生活が維持できず、もっともいじめを生みやすい土壌をつくって

いく。相手とのコミュニケーションでは、自分の思いに、相手の気持ちや立場を考えた「理性のフィルター」をかけてから、相手によく伝わるよう表現を工夫しなければならない。

プラスの気持ちを的確な言葉にして相手に伝えることにより、相手に安心感や相手の承認欲求を満たしてやることができる。

とりわけ感謝の言葉や褒め言葉は、具体的な事実を添えて確実に相手に伝えていきたい。話し合いや人間関係づくりをスムーズに行う秘訣であると言ってよい。

1 コンプリメントで大事なことは

コンプリメントで大事なことは、相手の話をよく聞き、よく行動を観察した上で、具体的な事実に基づいて行うことである。内容のない単なる褒め言葉の羅列では、相手は「ムッ」とするだけである。

例えば「〇〇君の意見は、何をやればよいかよくわかり、いいね」、教師であれば、保護者に対し「お仕事のお休みを取るのは、きっと大変だったろうと思いますが、保護者会にこんなにたくさんお集まりいただいて、心から感謝しています。」といった具合である。

2 「受取上手」になる

コンプリメントで褒められた人は「受取下手」（心理学用語で「値引き」＝ディスカウント）にならず「受取上手」になりたい。例えば、「素敵なお服だね」と褒められているのに、「バーゲンで安かったのよ」と言わなくてもいいことを言うってしまう人も多い。そういう時には、「ありがと、うれしいわ」と言えばよいのである。

⑤ 相手が喜ぶこと嬉しくなること、それが自分の喜びとなるようになれば最高

「思いやり」という言葉は、人間関係やいじめの問題を考えるには、大事なキーワードになる。学級の全員が思いやりに満ちているならば、いじめは起こらないはずである。特に小学校では、この「思いやりの心」の醸成が生徒指導の一番のねらいになっている。

しかし、「思いやり」という言葉の意味は案外、“わかっているようでわからない”のではないだろうか。大人でも、どうすることが相手への思いやりなのかの判断に迷うことがある。迷っているうちに、何もしないで終わることもある。

とりわけ低学年の子どもに思いやりの心を育むには、より具体的な指導が必要であろう。そこで子どもたちには、「友だちが困っていたら助けよう」、友だちには「相手の喜ぶこと」、「相手が嬉しくなること」をしたり、そんな言葉をかけていこうといった指導が必要になる。それが「思いやり」だと教えていきたい。

そして、学級集団における個のあり方の理想としては、集団に貢献することや友だちの成功を自分の喜びと感ずることができる子どもである。そうなれば素晴らしい人間性を備え、他から絶大な信頼を受けることは間違いない。

そしてさらに、個の問題を個だけの責任にするのではなく学級集団のあり方を通して考えていきたい。（大人の集団ではそれがリスクマネジメントの核心となる）そうなる前に自分ができることはなかったのか、自分はこれからどう関わっていけばよいかを、みんなが真剣に考えられるような集団が、究極の“学級力”を備えた集団ではないかと思っている。そんな責任感の強い自律的な集団では、いじめは起きない。

⑥ 困っている子を見たら心を痛め、“ほっておけない子ども”にしたい

例えば、一人ぼっちの子を見たら、自分の“心が痛む”子どもを一人でも多く育てたい。上でも述べた「思いやりの心」を育てるには、相手の立場に立って考えるだけではなく、いかに相手の気持ちを汲むことができるか、とりわけ相手の心の痛みに共感できることが大きなポイントになる。

相手の心情、なかでも弱い立場やつらい立場にいる者の気持ちを共感的に理解し、助けられないでいられない気持ち、黙って見ていられない気持ち、特にそれを自分に置き換えた時の「心の痛み」が、相手への思いやりの行為の動機や推進力になっていく。

思いやりの行為は、決して相手への哀れみや安易な同情、自己満足からであってはならない。そうしないでいられない自分の心に動かされるものでありたい。

したがって学級づくりでは、友だちが困っているのを、誰もが「ほっておかない」、温かい絆で結ばれた関係をいかにつくっていくかが最も重要なことだと考えている。

(2) 集団にはどんな力をつけていけばよいか

① いじめ防止への取組は、理想とする集団づくりそのものである

集団の中で「いじめる要素のある子、いじめられやすい傾向の子、教師」、どこの学級でも最初は同じような人的構成である。

しかし実際には、時間の経過につれ、いじめが起きている学級と起きていない学級がでてくる。それはいじめを、人間(子ども)が根源的にもっている特性からみて、いたしかたのない問題、集団生活を行っていけば必ずおきる問題として片付けてはならないことの証左であり、教師の指導を中核とする個の育て方の問題、学級集団のつくり方、運営の仕方の問題としてとらえていかなければならないことを教えている。

もしもいじめが起きた時には、その事実から謙虚に学び、何が足りないのかを理解することで学級は成長へと大きく動き出していく。

とりわけいじめを生まない集団づくりで特に大事だと思っていることは、「一人残らずみんながゴールすることをみんなで目指す集団目標づくり」、「一人一人が集団に貢献するための組織づくり、役割分担」、「公正で支持的な集団規範・風土の確立」、「学級における一人一人の尊重と一人一人が活躍できる確かな居場所づくり」、「学級集団の望ましい人間関係づくりと『心友』づくり」、「弱い者の味方である支援的リーダーの多数育成」、「集団の自己点検、自己評価システムの確立」等である。

そう考えると教師のいじめ防止への取り組みは、望ましい学級集団づくりそのものなのである。

② 相手と比べ妬むのではなく、相手のよさを素直に認め合える関係づくりを

いじめはいろいろな関係で起きるが、基本的には人間関係のトラブルが一番大きく作用する。いじめは人間関係が「悪い」という状態を超えて「劣悪」になっている。

その要因の一つに“妬み”がある。相手が自分より優れていることを認めたくないのであり、とりわけ集団の中で、あらゆる意味で自分が最下位であることは何よりの屈辱と感じている。そんな“妬み”が“モロ”に出ているような学級では、常に自分と相手を比べ、互いに足を引っ張り合い、何時いじめが起きてもおかしくない状況を生んでいる。

一方、経験的ではあるが、いじめのない学級の最大の特徴は、他との違い、とりわけ「自分より優れている相手のよさ」をみんなが素直に認め合っていることである。

それは急にできたり、理屈がわかればできるのではなく、学級での集団目標達成(授業、係活動、行事などの)に向けての、学び合い、協力、助け合いなどを通し、友だちのよさに気づき、認めていく実体験を積み重ねていくことでそんな人間関係ができていく。

③ 教師が率先し、モデルとなりながら望まし風土や集団規範をつくり上げていく

学級の風土や規範が、「一人一人が対立している冷たく防衛的」なものか「支え合い高め合い、期待し合っている支持的・期待的」なものか、「弱い者がみんなにばかにされる存在なのか、みんなから助けってもらえる存在なのか」、「公正で正しいことが揺るぎない行動の基準となり、みんなが支持し実践しているかどうか」などは、いじめを生む生まないはもちろん、学級での学習や活動、個の人格形成にも大きな影響を与える。

なぜならば、その集団がもっている風土や規範は暗黙のうちに集団内でのメンバーの行動や価値判断の基準を与え、時には規制し、メンバーはそれに合わせ考え行動することで、自己の内部にそれが習慣化されていくからである。

ところで、風土づくりに一番大きな影響を与えるのは、その集団のリーダーの考え方や行動の仕方である。学級であればもちろんそれは学級担任である。

重要なことは、教師がいじめを生む集団とは対極にある集団の風土や規範をつくるべく、

「子どもにしてほしいこと、こうなってほしいことを率先垂範し、子どものお手本になること」である。

子どもの考え方や行動は、まず尊敬する人の真似からはじまると言われている。教師はこのことを常に心にとめておきたい。

④ 一人一人が存在感をもち集団に貢献することで確かな居場所づくりを

一人一人が存在感をもち、輝く集団をつくりたい。それには、一人一人が学級にはなくてはならない存在になることである。

全国個集研会長の新富康央氏(國學院大學教授)は、学級の理想として「トーフから一粒一粒が存在感をもっている納豆へ」と、その姿をわかりやすい言葉で説明をしている。

それを実現するためには、組織や役割が重要な意味をもつ。集団の目的達成に向け、全員が役割をもって貢献するシステムをつくることである。

そのためには、通常は大きな集団ではそれを実感することが難しいので、小集団を活用することになる。小集団であれば、そこでの活動や運営のためには、一人一人がその集団にはなくてはならない役割を分担し、責任を果たさなければならないからである。

しかし、その役割は分担された者に任せっぱなしの“我関せず”ではなく、できない者がいたらその仕事を助けたり、本人が欠席している時は代わって役割を果たしてやるなど、身をもって協同を教えるためのものとなり、いじめとは対極の人間関係に進んでいく。

もちろんその過程では、互いの違いや個性を尊重することは欠かせず、また周りの者が彼が活躍できる場面を意図的に用意するなど、集団に対する所属感を増していく。

そして、この学級ならば、“自分にもいつかは必ず出番がある”という確信をもつことこそが、学級生活のより所と何よりの心の安定を与えるのである。

また、子どもは集団の目標の達成や集団の仲間づくりに進んで貢献することで、仲間から「感謝」され、更なる「期待」を受けることで大きく成長していく。

みんなから感謝されることにより、「自分は集団の役に立っている」、「自分はこの集団にはなくてはならない存在である」と実感し自己有用感を高める。

さらに、みんなから期待をされることにより、「自分もやれる、やってみよう」という活動意欲を高め、自信をつけていく。子どもたちは、このような経験を通して、学級における確固たる自分の居場所ができていく。

⑤ 子どもの中に、支援的リーダーをできるだけたくさん育てる

集団にはリーダーが必要である。どんな学級をつくるかは、教師がどのようなリーダーを育てるかに大きく左右される。いじめの問題にもリーダーはその防止や解決の鍵を握る。何としても支援的なリーダーをたくさん育てたい。

支援的リーダーとは、リーダーに必要な課題遂行機能とともに人間関係調整機能にも長けたリーダーである。とりわけ、「集団の中での弱い子やみ出している子の味方」、「困ってる子をやさしく助ける」、「できるだけ全員平等に出番を与える」、「目立たない子を支えて達成感を味わわせる」、「人間関係のトラブルをうまく調整する」、「仲間はずれを絶対に出さない」、大変難しいことではあるが、リーダーにはこのような態度や力量がほしい。

教師は、このような力を備えたリーダーをその育成の重点とし、できるだけ多くの子どもを支援的なリーダーに育てていきたい。

その指導には教師がモデルになることはもちろんであるが、まずは、従来型(小学校では重用されている課題遂行機能に長けている)の、高いリーダー性を身に付けている子どもにこそ、そんな心遣いが出来るよう指導を徹底して行いたい。とりあえずは小集団の中で多くの経験を積みせ、「仕切る力」よりも「助ける力」を重点的につけてやりたい。

そんな支援的なリーダーが学級に多くいればいるほど、そして彼らがメンバーの支持を集めれば集めるほど、学級は極めて安定した集団となる。

そして彼らは、誰から言われなくとも、いじめに対してはその意識を高くもち、学級にいじめが起きないように日頃から細心の注意をはらっている。

⑥ 集団が自己評価を行うシステムをつくり、互いに注意し合える関係を

よく、教師の決めた目標や評価項目をもって子どもに評価させ自己評価と称している場合があるが、それは自己評価ではない。

本来の子どもの自己評価(集団の在り方や集団活動を対象にした場合)とは、予め自分たちで決めた目標に照らして評価項目を決め、それで評価することが自己評価である。

それができているならば、その評価結果は大きな意味をもち、集団に対し新たな目標を与えたり、改善のための手だてを導き出してくれる。

そしてその自己評価を定期的に行うことは、集団が成長していく大きな力になる。そのシステムをぜひ確立し、持続させていきたい。そのプロセスでは、もちろんいじめの有無の検証もなされていく。

また最近の子ども達は、自分達同士で注意をし合わなくなったと言われている。それは、教師から受ける、「みんなの迷惑になっているからやめなさい」といった主旨の注意と同じ働きを教師が子どもに期待しているならば、同じ年齢同士の学級内では、互いに牽制し合うことになりなかなか難しいからである。

今の子どもたちにそれを強制したときには、集団の中に注意をする人間といつも注意をされる人間との上下関係を敢えてつくることになり、それがいじめを生むきっかけにもなる。たいていは、注意をする立場の子どもの方がいじめのターゲットになるのである。

しかしみんなで真剣に学び合っているときに、集中力を欠いたり、他に迷惑をかけるような行動があれば、友だちから注意を受けることになる。

それは、教師から注意を受ける場合とは質的に大きく違い、「君も一緒にやろうよ」という気持ちからの注意なので、素直にきくことができる。そういう注意ならば子ども同士でも注意ができるし、決していじめにはつながらない。

8 いじめを許さない学級ではなく、みんなが仲よく高め合う学級を

(1) 「いじめを許さない学級」ではいつまでもいじめはなくなる

新潟県内における、ひところのいじめ撲滅運動の中では、「いじめのない学級」、「いじめを許さない学級」、「いじめ見逃し0」などが標榜され、実践が行われてきた。

そのことは、学級づくりにおいてはとても大切な価値ではあるが、その学級づくりではいじめはなくなっても、本来の学級のよさが失われ、その限界があることもわかってきた。それは理想的な学級づくりの重要なステップではあるが、決してゴールではない。

① 行動の基準が「いじめかいじめでないか」では学級が暗くなる一方である

「いじめのない学級」を学級づくりのゴールにした時には、学級での子どもたちの対人関係に関わる考え方や行動、善悪の判断基準が「いじめかいじめでないか」になっていく。

そうなると、人間関係はよそよそしいものになり、結果的に友だちとのかかわりを避けたり、トラブルを恐れ他とのかかわりには極めて臆病になり、特定の気の置けない仲間とだけの交流になってしまう。そして学級からは明るさが消えてしまう。

学級における行動が、いじめかいじめでないかで判断されてしまうようでは、一人一人がばらばらで、自分を守ることを優先とする学級になってしまう。それではいつまでたっても、前向きでみんなの仲がよく居心地のよい、高め合う集団はできない。

② 「いじめたかどうか」ではなく、「助けたかどうか」を厳しく問える学級に

そこで目指すべきは、「いじめを許さない学級」に止まらず、「みんなが仲よく高め合う学級」である。それは単なる仲良し集団ではなく、人間関係は支援的ではあるが、学びに対しては厳しさをもった課題追究的な集団である。

みんなが仲よく高め合うことをみんなで納得して目指している学級では、一人ぼっちの子がいたら、「私はいじめていないので関係ない」というのではなく、「何故声をかけてや

らなかったのか」、「何故仲間に入れてやらないのか」を厳しく問うことができる。

また、できないで困っている子を見て見ぬふりをしていたら、「何故手を差し伸べてやらなかったのか」、「ほっておいたのか」を厳しく問うことができる。

学級において、そのことが当然のこととして行えるようになるには、もちろんそれをみんなの目標として掲げ、その価値を共有することは前提ではあるが、具体的には、一人ぼっちの子を見たら、自分の“心が痛む”子どもを一人でも多く育てることにある。

一人ぼっちの子がいたら、それを見て自分の心を痛め、走って行って仲間に入れる。こんな行動を、みんなができることをゴールとした学級づくりを目指したい。

いじめ根絶のためにいろいろな取組みがなされているが、とりわけ力を入れ実践してほしい点である。

(2) いじめを防ぐにはやっぱり教育の力がなくてはならない

理論的には、みんなの仲がよければ、いじめなど起きるはずはない。しかし、そうは言っても、学級では感情をもった生身の人間同士が集団生活を送っている。友だち同士の間関係のトラブルや利害関係をめぐっての衝突が全くないと言えばウソになるであろう。問題はそこからである、それまでの教育の力が試される場面がやってくる。

教育の力が及んでいなければ、それが簡単にいじめにつながっていく。

個や集団が育っていれば、それに冷静に対処し、互いにブレーキをかけたり、集団で知恵を出し合いながら解決に向かうはずであり、その対立の構図も決して1対大勢にはならない。従って、トラブルがいじめには発展することはない。そしてその苦い経験をみんなで乗り越えることで個も集団も一回り成長していくのである。

(3) 「みんなが仲よく高め合う学級」をつくるための指導のポイント

いじめのある学級の対極はみんなが仲の良い学級である。しかし、学級というのはいろいろな顔をもっている。単に子どもたちの生活の場であるだけではなく、授業では学習集団となり、活動ではその基礎集団となる。

したがってただ仲がよいだけでは不十分である。それぞれの場面での目的達成において十分に機能しプラスに働く人間関係の構築が必要であり、それにより相応しい学級づくりをしなければならない。

基本は、一人一人が役割を持って集団に貢献し、切磋琢磨しながら、一人残らずゴールさせる協同的な活動を通すことで、個も集団も成長していくのである。

そこでは、単にメンバーは互いに仲良く助け合うだけではなく、自由に意見を言い合い、時々相手への“突っ込み”も入り、反対意見や批判も遠慮なく言えるような、温かくかつ課題追求的な風土や人間関係がどうしても必要になる。

そこでこそ、一人一人が伸び、教育の場としての集団の意味がある。

そのためには、そうすることが価値のあることだという価値観をみんなで共有し、学習や活動を協同的に進める中で、そのよさを実感していくことが何よりの力になる。

そしてそれらの実践を通し、“いじめがなく、みんなが仲良く高め合っている自分の学級を私は大好きである”“私の学級は私の誇りである”というところまで到達していくならば言うことはない。

※「みんなが仲良く高め合う学級づくり」のための指導のポイント（順不動）

- 1 子どもには「学級の“全員”と仲よくし互いに高め合う」という目標をもたせ、そのために自分はどう考え、判断し、行動し、貢献したらよいかを考えさせる。
- 2 この学級では、「いつかは学級の全員に出番がある」という確信を子どもと共有し、計画的、意図的にその場面を用意するなど、実現のための努力を怠らない。
- 3 相手のよさに共感し、それを素直に認めることができる「温かく広い心」をもつことが人間関係づくりでは最も大切であることを、繰り返し指導していく。

- 4 相手が困った時にはさりげなく助け、成功した時には一緒に喜んでやることで、相手との仲が急速に進み、誰とでも仲よくなれることを体験させていく。
- 5 一人ぼっちの子がいたら、見つけた人はやさしく寄り添う。学級の仲間はどうな場面でも決して一人にしないことを、学級の風土になるまで訴え続けていく。
- 6 互いのよさや能力が発揮されるような、活動の場や協力場面を多く設定する。そして、そこでの相手の活躍や自分よりも優れている点、良かった点を認め、それを相手に伝えてやることで仲良くなれることを、経験的に理解させていく。
- 7 学習集団における友だちは、蹴落とし合う競争相手ではなく、認め高め合う「学びの共同者」としての認知こそが重要である。そんな関係が子どもの心を安定させ、子どもを遠慮なく伸び伸びと学習に集中させる。
- 8 何より相手の話に耳を傾け、心を込めて聞くことに力を入れ、子どもを優れた「聞き手」に育てることを、風土づくりの最大のポイントにしたい。
- 9 相手の意見への疑問や批判、反対意見は、より高い目標に到達するためには、どうしても必要なので遠慮なく出し合うことを強調していく、その時にはできれば代案をもって行うことを指導していく。
- 10 子どもの小さな“トラブルサイン”を見逃さず、すぐに応えてやり、教師の立場から子どもの人間関係づくりをさりげなく手伝い、見守っていく。
- 11 いわゆる“影のボス”や“足を引っ張る子ども”を見逃さず、特別扱いせず、寄り添いながらねばり強く指導を続け、必ず学級の温かい輪の中に入れていく。
- 12 行事などでは、全員で同じ目標を目指し、一人一人が役割をもち、苦労を分かち合い、終わった時には互いに“肩をたたき合う経験”を多く積ませたい。
- 13 「みんなが仲良くし、高め合う」ための、自分の学級での約束事（具体的な行動目標）をいくつか話し合っ決めて、それが当たり前になるまで、見守っていく。
- 14 最終的には、「一人残らずみんなでゴールする」ことを教師を含め、全員の目標にし、そのための支援を、誰が誰に対してもいつでも行うことを強調していく。
- 15 他から与えられたのではない、自分たちがつくった評価基準（理想の学級の姿を具体的な姿あるいは行動目標で）で評価を定期的に行っていく。本物の自己評価となる。それを基に、学級風土の見直しや改善を図っていく

おわりに

「学校におけるいじめはなくなる」という人がいる。その理由としては主に次のようなことをあげる。人間の本性の中には、「他人には負けたくない」、「自分より弱い者をさげすむことで自分が安定する」、「できる者を妬む」、「ライバルの足を引っ張る」等、人間には、いじめにつながるようなこんな心がないと言えれば嘘になる。

また、学校教育は集団教育であるが故に、人間関係のトラブルが起きたり、他人と比べて評価されたり、敢えて競争させられたりという、いじめを生みやすいシステムが本来的に組み込まれているのでそれは仕方がないことである、というものである。

これらは、一見射ているように見えるが、長年学校教育に携わっていた者としては、無条件で認めるわけにはいかない。なぜならば、そこには“教育”がないからである。

生意気を言わせてもらうならば、この考え方は、いじめ発生に対する“教師のアリバイづくり”、“自己保身のための方便”に使われる理屈であると考えている。

学校においていじめを生む要因を便宜上、個人的因子(内的要因)と環境的因子(外的要因)に分けて考えるとすれば、前者は個人的因子であり後者は環境的因子と言える。

私の経験上、前者については、いつとんな理由でいじめが起きるか、教師の想像をはるかに超えることがある。したがって100パーセント防ぐことは難しいが、少なくともそのような本性がむき出しにならないよう、高旗正人氏の言葉を借りるならば、正しい判断

力と自律の心をもって、その本性を“心の奥”に置ける子どもを育てたい。別な表現を用いるならば、自己の本性に打ち勝つ理性の力を徹底して育ていくのである。これこそが教育の力であり、意図的な指導なくしてはそのような子どもを育てることはできない。

また、後者については、集団づくりの問題として、協同学習の理念とその具体的な実践により、その要因をほとんど取り除き、いじめのない学級をつくっていることは、全国の多くの教師による実践により証明済みである。

しかし相変わらず現場では、教師が集団内での子ども同士の競争を煽ったり、勉強のできる子や教師の言うことをきく子だけに高い評価を与えるなどし、むしろいじめを生む土壌を自らつくりだしている教師がいる。そういう教師ほど、そのことには気付いておらず、集団生活をしていけばいじめは起きるものだと公言してはばからない。

そもそも、いじめ発生の環境因子ということであれば、その負の環境を排除し、それを「最適化」することで、いじめを100%近く防げることは、理論上も可能である。

そのポイントは、本論でも繰り返し述べているが、敢えて3点挙げるならば、「できない子や学級で一番弱い子を中心に据えた学級づくりを行うこと」、「学習や活動の目的達成に向けては、“競争”ではなく“協同”のよさを最大限引き出すことで、一人残らずゴールさせること」、「人間関係づくりでは、学級の誰とでも力を合わせられることと、誰もが“心友”がもてるよう推進していくこと」であると考えている。

いじめ根絶に即効薬はない、私たちの“教育”そのものが問われているのである。

もしもここまで読んでいただけたならば、感謝にたえない。私の独善的な解釈や挑戦的な記述もあることは承知の上である。本レポートがいじめ問題を更に考えるきっかけとなり、少しでもいじめが減ってくれば本望である。

<主な参考文献・資料>

- ・高旗 正人 講座「自主協同学習」全3巻 1981 明治図書
- ・高旗 正人・新潟県個集研 「人間関係をつくる力を育てる」 2000 黎明書房
- ・高旗正人 論集「子どもと学校の理論」 2007 ふくろう出版
- ・片岡徳雄・原田彰「いじめを起こさせない学級経営・学校経営」1987 黎明書房
- ・杉江修治 編著 「協同学習がつくるアクティブ・ラーニング」2016 明治図書
- ・飯塚 竣 編著 「学校教育の今日的課題I」1996 東京書籍
- ・堀内一男 編著 「変化の時代の学校教育IV」2004 東京書籍
- ・小沢牧子 「『心の専門家』はいらない」 2002 洋泉社
- ・全国個集研 「第41回全国大会 岡山大会研究紀要」 2014
- ・総合教育技術 H8・4月号 「子どもを見る目を養う」 小学館
- ・新潟県教育委員会「いじめの起きない学校づくりのために
～いじめ防止学習プログラム～」 2000
- ・文部科学省「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集
(学校・教員向け) 2008
- ・文科省通知 「いじめ問題への取組の徹底について」 2006
- ・文科省通知 「いじめの実態把握及びいじめの問題への取組の徹底について」 2010
- ・森口 朗 「いじめの構造」 2007 新潮新書
- ・内藤朝男 「いじめの社会理論」 2001 柏書房
- ・内藤朝男 「いじめの構造」 2009 講談社
- ・内藤朝男・萩上チキ 「いじめの直し方」 2010 朝日新聞出版
- ・山脇由貴子 「教室の悪魔」 2006 ポプラ社
- ・児童心理 特集「いじめ」と子どもの自殺 2007・4月号
- ・児童心理 特集 人が傷つく言葉を使う子 2010・8月号
- ・「内外教育」 2013 9月27日発行
- ・いじめ防止対策推進法(平成25年法律第71号)